

人 農・園 田・然 自

序 松 喬 江 吉
著 傅 田 和



自然・田園・農人

昭和三年五月五日印刷
昭和三年五月十日發行

自然・田園・農人

編輯兼 財團
發行者 法人 文明協會

右代表者 市島謙吉
東京市牛込區早稻田町三十四番地

印刷者 南助保
東京市小石川區新諏訪町五番地

印刷所 洋秀社
東京市小石川區新諏訪町五番地

不許
複製

發行所

東京市牛込區早稻田町三十四番地

財團
法人 文明協會

電話牛込三五四二番
振替東京二一八九〇番

序

近代人が情感の眼を見開いて自然に對して以來、我々は或る時は、無邪氣なる幼兒としてその胸に抱かれ、或時は蕩兒の如くその懷を捨て去り、そして又或時は、その叱責を恐れながら近寄り、うかがへば、以前の溫容は冷たきものと變つて居り、その變貌に驚き恐れ、再び逃げ出さんとすれど、何處まで逃げても逃げられず、常に背後からの追求を感じる。丁度、雲を起して虚空を縦横に飛び廻つた得意をもつて歸つて來て見れば、依然として如來の掌上に載せられて居た孫悟空の姿のやうなのが人間である。この自然の背反者は逃げて、逃げて、又その背反者等の集つて作る人間社會へ身を隱すけれど、その背反者の團體そのものが既に崩壊せらるべき運命に際會して、自然の怒は一舉にして、その團結を投げ倒さずには置かない。——自然は常に慈母でもなければ、繼母でもなく、また常に神の縁の衣をまとふて居るものでもなければ、同時にいつも醜惡の妖魔でもなく、奪らい

つも不變の嚴父である。過去幾世紀間、我々はこの自然の嚴父に對して、様々な我儘をして來た。

何故に人間は、同じ自然の胸の上で、同じ自然が共通に人間に與ふるものを、區劃を立て、奪ひ、争ひ、摺み合ひなぞして居る暇に、更に協力して、その自然が與ふる共通の實の發掘、共通の生命の源泉を切開く事に心を向けないであらうか。それは皆自然の存在を忘れて居るからである。共通嚴父の存在を忘れてゐるからである。アナトオル・フランスは言ふ。「土地、鑛山、水、地球の有ゆる實質、有ゆる力を發掘する爲めには、人間、有ゆる人間、有ゆる人類でなければならぬ。地球の完全なる發掘利用は、白人、黄人、黒人の結合したる働らきを要求する」と。これは自然の存在を忘れずして、その胸上で、協力して力強く働く事である。自然は人間のこの協同の努力をこそ求めて居るのである。同じ自分の胸に生れた人間どもの協力一致、そして、それが自分の胸に強く喰ひ入つて來る事をこそ自然は求めてゐるのである。それを忘れ、自分を無視し、徒らに自分の胸の上で所

有を奪ひ合ふ如きに對しては、必ずや自然は嚴しく叱責を加へずにはゐられないのである。心すなほに自然の命令に聽け。個人にしてもさうである。團體生活にしてもさうである。我々の五體をめぐる血潮の昇降、流過も、海洋の潮の満干と調子を通はせ、我々の心臓の鼓動も、空をすぐる空氣の流波と歩を合せてゐる。心をちつけて、氣を澄まし、よく心眼を見開いて、自然に對し得るものは、本然にして、大きな生活狀態に身を置いてゐるのである。

海洋の示す自由を、山岳の藏する永續性を、而して森林の見する集合の姿を、人間の生活組織に表出する事を忘るゝな。自然をたゞ一つの人間生活のデコオルの如く見なす者は、必ずそのデコオルの發動に驚かされて、狼狽を來すに異いない。常に大地の存在を忘るるな。地に即く文明を持たない國は、空中に築かれたる樓閣よりも崩壊し易い團體である。——自然の存在を忘るゝな。日夜立つる自然の無語の聲に耳傾けて、その命令に従つて組織を改めよ。その聲をして常に人間の中に發露せしめよ。清新にして自由、協同にして平

等、その端的直接な表現が、我々を向上の道にむかはしむるであらう。

自然に對しては甘へるな。我儘を振舞ふな。恐るゝな、逃ぐるな。端然として立ち、素直に、柔順にそれと面接せよ。神話の時代、宗教の時代、情緒、神經の時代は過ぎて、明智を以つてこれに向ふべき時代に我々は來てゐるのである。

和田傳君の「自然・田園・農人」は、この意味に於ける著書として最も清新なる、潑刺たる詩的氣分と、自然そのものゝ生命とを農人生命に發現したる唯一の作品といふべきであらう。新進農民政家たる和田君の筆は、その所説と共に全く純眞清新の天地を發展して餘すところなき好著である。

昭和三年五月

吉 江 喬 松

目次

次	目
一	大地の言葉……………(一)
二	人間生活と自然 その歐羅巴と日本との比較其他……………(一五)
三	田園の形態とその特質……………(三三)
四	田園及び農人の歴史……………(四一)
五	自然と徳……………(六三)
六	自然に近く生活する……………(七二)
七	獨逸に於ける田園讚美の思想其他……………(八〇)
八	シヨルジュ・サンドと田園讚美……………(八七)

九 農人の姿態……………(一一)

十 『イワンの馬鹿』とトルストイの重農的思想其他……………(二三)

十一 蘆花と田園主義……………(三三)

十二 『地の子』の思想……………(四三)

目次終

自然・田園・農人

一 大地の言葉

人類文化の歴史は、言ひ方によつては、人類と自然との交渉對立の歴史であつたと言ふ事も出来る。人類對自然の——敵對、鬭爭、背離、共存、融合、合一、その様相は時代によつてさまざまであつたけれど、人類文化史の脊骨をかたちづくるところのものは、この兩者の關係であるといつてよろしいのである。

ところで、その人類文化史の推移して行く経路を考へて見ると、その典型的な容姿は、要約して、興榮ミ、爛熟ミ、革命との三段階として觀ることが出来るやうに思はれる。即

ち、一つの文化が興り榮える。そしてその次にはそれが爛熟し、頽廢する。そしてそれは遂に崩壞し、或は破壊されて、それに打代はるべき新しきものの出現があるわけになるのである。

こゝに問題にして見たいのは、この第三の場合である。即ち、一つの文化が絶頂を極めて爛熟し、頽廢し、そしてそれに打代はるべき新しきものゝ出現がなされようとする場合である。この場合、歴史の語つて居るミところを観れば、次のことが容易に觀取せられるのである。

一、爛熟し、頽廢したる舊時代を破壊し、清新な新時代を建設しようとする時代に、人類の改革に燃ゆる耳は、つねに、あらためて大地の聲に、自然の聲に、聽き入るこゝを忘れなかつた。その聲にこそ、人類は常に改革を聽き取つて來たのである。

二、それを別な言ひ方にして言へば、この場合、この大地の聲を、この自然の聲を、先づ先んじて身をもつて聽き得た者こそ、改革の烽火をうちあげたものであつた。人類の改

革者は、いづれも、この聲を先んじて聴取した人々であつた。別な言ひ方をすれば、彼等はいづれも、自然人、田舎人であつた。

私たちはこの事實についてこそ、少しく語りたがいと思ふのである。

人類のもつ最大の改革者ジャン・ジャック・ルウソオの『自然にかへれ』といふ哲學は、單に十八世紀末にかのフランス大革命を誘致し遂行させたばかりでなく、いづれの時代も、改革精神の根本をなすべきものであるが、まづルウソオは如何なる人であつたか、如何にして自然の聲を、人類の言葉に翻譯し得たかを述べてみよう。これは後章でも言及するつもりであるが。ルウソオは、十八世紀末に、歪める、人工的な、虚飾欺瞞に満ちた當時代の人間生活を、社會の組織を、自然の法則をもつて照らし出し、その徹底的改革を論じた最初の人であつて、その自由平等、人類友愛の大精神は、自然の法則を感得したものに外ならなかつたのである。自然の姿を、彼は人間生活の上に打建てようとしたものに外ならない。自然こそはルウソオにとつて、新しき生命の源泉であつた。父であり母

であり、師でもあり、友でもあり、情人でさへもあつたのである。『この恍惚たる歡喜は、自失せんばかりの激動をもつて、かく叫ばしめる——おゝ偉大なる存在よ、おゝ偉大なる存在よ、それ以上は何も言ひ、何も考へることは出来ない』彼はマアルゼルブへの手紙のなかで言つてゐる。ルウソオがこの感動のなかにこそは、人類が愚かしくも久しく背いて來た自然を、再び見返へして恍惚とせる驚愕が響いてゐるのである。

『初春の嫩芽を眺めた時の悦びは、口では言はれない。再び春に出遇つた私は、天國へ復活した者のやうであつた。地上の雪のまだ溶けかねてゐるをも關まはず、牢獄にもひとしい住家を抜け出して、鶯の初音を聴きに、いきせきシャルメットへ飛んで來た。もう私は死ぬ事などは考へて居ない。實際、この時から寂しい田舎に居て、重病にゝかつたといふことは一度もなかつた。それは随分苦痛を感じる事はあつたけれど、寢床へ打仆れるやうなことはさらになかつた。折々病氣になつたと思つた時には、側の人に向つてかう言つた。——もし私が今にも死にさうになつたら、どうか檜の木の下へ運び出して下さい。そ

うすればきつみ快くなるに違いないからと』これはルウソオの自叙傳『懺悔録』の中の一節である。この自然といふ新しく目の前に現はれた偉大な存在の聲に聽いて、彼は一代の名著『エミール』を書いた。『新エロイズ物語』を書いたのである。彼はすべてを、その思想哲學は勿論、情緒をも感情をも、その生活力をも、悉く自然から享けたのである。

このルウソオの影響こそ劃時代のものであつた。ルウソオの弟子ベルナルダン・ドウ・サンピエエルは、やがて『ポオルとヴァルジニイ』といふ物語の中で、歐羅巴の虚偽からは遠く熱帯の孤島に、「自然と徳とに従つて生活する」ことに人間の至福はあるといふ姿を、麗はしくも心ゆくまゝに描き出して見せた。

ルウソオの自由平等、人類友愛の哲學は、いくばくもなくその政治的表現として、かのフランス大革命を惹起し、その文藝的表現として、かのロマンティスムの大運動を招致したのであつて、物心兩界に於けるこの改革、この立直しほど、近代に於て偉大なるものはなかつたのである。これは一言にして言へば、宛ら蕩兒が故郷の家の扉を叩くやうに、

一度は背いた奥所に、人類が思ひを醸してその聲をたづねて行つた事に因を發したものに外ならなかつたのである。

自然は言葉なく、つねに人類に正しき道を教へるものである。ただその懐に卒直に蹠く者が、その眞實の聲を聞き得るのだ。ルウソオは、ただ誰よりも先んじて、その正しき道を聞き得たのに外ならなかつた。そしてこの自然の兒ルウソオの影響が、大洪水のやうに全歐羅巴を浸したのは、歐羅巴がルウソオ一人の言葉に動かされたといふよりは、ルウソオによつて、人類に呼びかけて居る自然の聲を耳に聴くことが出来たのであるといふ方が、さらに適切であると思ふべきなのである。

ルウソオの指した道を、さらに遠く歩みつづけたものに、近代の偉人レオ・トルストイがあるが、トルストイは、まづその青年期の第一歩に於て、當時の西歐の頽廢をそのまゝ現出したモスクワの都會的頽廢の中から逃れて、南方コオカサスの清新の田野に救を求め

に出て行つたのである。彼はその記録を『コサック』といふ小説に書いて居るが、都會を逃れて南方の原野に橋を驅つて行く主人公オレニンの前に、突如、地平線の彼方の雲間に、莊麗な、青い、山の姿が現はれる所がある。あれは何んだ？ とオレニンは訊ねる。山でさ！と馭者は答へる。

おゝ！ 山！ 山！ オレニンは驚歎して叫び出す。この時のオレニンの驚愕と恍惚自失に、私たちは、かつてルウソオのそれを思ひ起さずには居られない。私たちはこゝにも、人類の新たな驚愕を見る。コオカサスに於ける、主人公を繞ぐる原始的な自然生活は、巻中に見ざましく描かれて居るが、特に原始人エロシユカ老人に若きトルストイの理想は繋がれてゐる。それらの田舎人の頑韌な、確かな、分裂のない、一貫した生活に打ち克ち難い誘引を感じた彼は、彼等の如く、自然の生きるが如く生き、自然の如く平靜に、單純に、明晰に、そして自由に、人間生活をしてあらしめたいといふ理想を燃えあがらせたのである。

そしてトルストイは、その八十年の生涯の後に、ついに農人の胸の中に人類の理想を求めて行つた。かつてルウソフは、人類の理想的典型として自然兒エミールを創造した。またジュリイ——『新エロイズ物語』の主人公——を創造した。サン・ピエールは、ポオルを、ヴァルジニイを創造した。けれどもトルストイは、現實に、この自然に、この大地に即して生活してゐる人々、現實の農人のなかに、この理想を求めやうとしたのである。ルウソフは書物のなかで、その愛兒エミールを、ジュリイを、教育したのであつたが、トルストイは、そのヤスナヤ・ポリャーナの茅屋に、自ら學を建て、農人の子供を集めて教育に従つたのである。トルストイ自ら、晩年には、一人の農夫としての生活に這入つて行かすにはゐられなかつた。

そのためトルストイは、『戦争と平和』『アンナ・カレニナ』等の作者としての最高の榮譽を一蹴し去り、専ら農人の魂のなかに美はしき人間生活の本態を探し求めて行き、そのかすくの民話、寓話、國民傳説を書いたのである。物質上の慾望がいかに人間生活にと

つて恐しい害を持ち來すかを『人はされだけの土地を要するか』といふ物語のなかに、物質上の富の否定、勞力の貴さ、純真な人間の本性の力の禮讚を『繪本のために書かれし物語』のなかに、その底知れぬ善良さによつて幸福を得るといふ農人の一典型を『イワンの馬鹿』のなかに、彼はそれ／＼書いてゐる。そして晩年のトルストイは、『戦争と平和』や『アンナ・カレニナ』の作者としてよりも、これら民話の作者であることを誇りとした。彼はつねに農人とともに語り興じた。『ほんとうにいゝわれ／＼はほんとうの幸福が何處にあるかまるで知つてゐない。あの人たちと一時間話をするのは、社交界の幾晩や大饗宴などよりもはるかに貴い』と、トルストイは、彼のヤスナヤ・ボリャアナの學校に教師を務めてゐたファイナアマンに語つてゐる。

『自然にかへれ』といふルウソオの言葉は、トルストイの場合では『民衆の中へ』といふ言葉である。そしてこの場合、この民衆といふ言葉は、農民であるとは限定しないが、明らかに、より近く、或は最も近く、自然に即して生活してゐるところの集團を指し

てゐるものに外ならない。古來、革命の相言葉として最も典型的な言葉は、この『自然にかへれ』『民衆のなかへ』といふ二様の言葉である。そしてこの二様の言葉は、まづたくその精神を一にしてゐるところのものであり、ただ前者が十八世紀末のフランスに於て叫ばれ、後者が十九世紀後半のロシアに於て叫ばれたといふ社會的動機に倚存してゐるに過ぎないのである。

自然はつねに、その忠實な使徒をして先づ起たしめ、人類の組織をたへず改革し、變革して行くものである。

そして歴史の示すところに従へば、その改革、革命の第一の聲を上げたものはいふまでもなく、その聲に應じて起ちあがり、その改革、革命を大成した者たちは、みな最も自然に即して生活してゐた人々、即ち田舎人であつたのである。彼等はみな、ひとしく彼等のうちに孕んでゐた要求を、先覺者によつて明示されて起ちあがるのを常態とするからだ。

我國の近代の偉大なる文化革命であつた自然主義運動について考へて見るがよい。いま

一つだけここで述べてみよう。——自然主義運動は、ただに文藝上の、或は文藝内の運動ではなく、實にわが國の文化を變革したところの近代の大革命であつたが、それは如何なる環境の下に、如何なる經路を経て、如何なる人々によつて成就したのであつたらうか。

私たちはこゝにも、都會的頽廢を打ち破つた清新な田野人の硬き手の業蹟を見る。

大まかに言つて、明治三十年代までの明治文學は、江戸末期の戲作文學の餘燼を搔きたてたものに過ぎなかつた、十八年に坪内逍遙の『小説神髓』『書生氣質』が出で、新文學の光はさし、長谷川二葉亭の出現を見、ついで『我樂多文庫』による硯友社、尾崎紅葉、山田美妙、川上眉山、巖谷小波、江見水蔭等の三十年時代に入り、一方、幸田露伴を中心とせる觀念派、森鷗外を主とする浪漫派の出現があつたのであるが、これ等は決して新文化の建設に參與すべき人々ではなかつた。これ等文化の業蹟は、いづれも、或は江戸の「粹」の復活であつたり、或は都會的頽廢情緒の低唱であつたり、或は現實に未だ觸れるところなき空想的、浪漫的な夢路の彷徨であつたりして、大膽に、深く、人生社會に觸れ

るものではなかつたのだ。一切の固定的觀念を除去し、あくまでも科學的に、實證的に、大膽に勇敢に、あらゆる人生の姿を識認し、人生の新領土を繰りひろげた自然主義文藝運動は、これ等都會文學者の傳統的な纖細な手をもつてしてなされるものではなかつたのである。田舎人の土まみれの手でなければ、田舎人の強靱な意志と、その自由なる感情をもつてしなければ、この大運動を成就させることは出来なかつたのだ。

若き田舎人國木田獨歩が、上州の田舎漢田山花袋が、信州の村夫島崎藤村が、淡路の野人岩野泡鳴が、かくて起ちあがらなければならぬ次第になつたのである。大地の力もり上つて、その使徒たちを起ちあがらせなければならなかつたのである。

先覺者獨歩は歌ふて曰く――

山林に自由存す

われこの句を吟じて血のわくを覺ゆ

嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林をみすてし

あくがれて虚榮の途にのほりしより

十年の月日塵のうちに過ぎぬ

ふりさけ見れば自由の里は

すでに雲山千里の外にある心地す

管を決して天外を望めば

をちかたの高峰の雪の朝日影

嗚呼山林に自由存す

われこの句を吟じて血のわくを覺ゆ

なつかしきわが故郷は何處ぞや

彼處にわれは山林の兒なりき

願みれば千里江山

自由の郷は雲底に没せんとす

——然り余は獨處にして自由なる一個の靈なり。當に自由に觀、自由に感じ、自由に現すべし。

この言葉は、獨歩の發足の決心でもあり、信念でもあつたのである。江戸頼慶文學の傳統と完全に訣を分ち、赤裸なる、眞に自由なる野人として發足した獨歩のこの信念は、まことに、自然に學び得たものゝそれであらねばならぬ。

『山林に自由存す』とは、言ひ得て直裁である。

二 人間生活と自然 その西歐と日本

との比較其他

自然、田園、田野人、これからについて語る前に、まづこゝで、これらを、時間的には歴史的に、空間的には西歐と日本との比較對照に於て、少しく調べて見たいと思ふ。

西歐の歴史を繙くならば、その人間生活と自然、大地との交渉關係の如何なる様相が觀取されるであらうか。私たちは、極めて大まかにではあるが、この人間生活對自然大地の歴史を、まづ西歐について一瞥して見ようとする。

人類が初めてこの自然と近づいた目醒ましい記録を、私たちは舊約聖書で見るのであるが、その創世記、出埃及記、詩篇、耶利未亞記、耶利未亞哀歌などによつて了解されるやうに、ヒブリー人は、それ以前のエジプト、アッシリア人等に見られるやうに、自然に對

して單に恐怖を抱くばかりでなく、悦びと憧れの情をそこに繋ぎ、愛と渴仰の心とを、宗教的情緒にまで高めたのであつて、自然全體をある偉大なる靈的なものゝ具現の姿として感じたのである。恐れつゝも愛敬し、渴仰し、信賴し、禮讚する心である。ギリシヤ人はこれと異り、自然には何處にも神が住まつてゐると觀た。莊麗なかのギリシヤ神話は、一讀了解されるやうに、これら神々と人間との交響樂に外ならない。そしてギリシヤ人はこの自然の到る處に住む神々と、入り亂れて戯れてゐる。これは宗教的に自然に對する心理ではなく、藝術的に自然と人間とが踊り狂ふてゐる姿である。

しかしながら、この地上の樂園はやがて閉ぢられた。ロオマ人になると、その自然に對する心理には、明かに前者の如く交響の相を見せてはをらない。人間は人間であり、自然は自然であり、そして人間は、自然を自然として眺めるといふ立場になつてゐるのである。そして、ロオマの時代が後半になるに、つひに人間は自然に對して眼を閉ぢてしまつた。キリスト教が起り、人々は自然から眼を閉ぢて、魂の問題に沈潜するやうになつたの

である。そればかりではない。キリスト教は、後にその自然の黙示といふ根本の思想からは離れて、自然は、ギリシヤ人によつて神の住むところと感ぜられてゐた自然は、この時代では、かへつて悪魔の住むところとされてしまつたのである。中世紀といふのがこの時代である。そして人々は自然からは意識して遠のいてしまつた。中世紀の都市の構造は、それゆゑ、いづれもその外廓を高い、健固な城壁によつて固めてゐる。かくて自然に對する長い鎖國時代は打ち建てられたのである。

そしてこの鎖國の港を開いた目醒ましい大革命、それがかの文藝復興期だ。ルネエサンスによつて、ギリシヤの古代美、諸々の學藝は復活し、人々は再び驚愕の眼をもつて自然の美に打たれたのである。寫真でもよいから、イタリイのルネエサンス時代の繪畫を見てみるがよい。レオナルド・ダヴィンチの繪畫の背景をなしてゐる空の青さは、この自然の發見に恍惚とした、燃ゆるやうな嘆美を孕んでゐるではないか。

このルネエサンスの代表者は、フランスではラブレエであるが、この巨作『ガルガンチ

『物語』などに現はれてゐる自然は、冒険探險の世界として人間の前にあらはれてをり、その多くの場合、自然のたゞなかに立たしめて人間の本来の姿を探し見ようとしてゐるものに外ならない。ラブレエがルウオソの始源とされてゐるのはこのためである。『ドン・キホーテ』の作者スペインのセルヴァンテスも亦この立場に立つものである。ルネエサンスになつてはじめて、人類は自然をば、藝術と教育と科學の源泉をなすものであるといふ觀方に到達したのであり、自然に對する考へ方が、甚だしく功利的であるとゞもに、甚だしく理智的になつてゐるのである。

歴史は繰りかへすものゝやうである。ルネエサンスの精神は、次に莊麗極まりなき彼の十七世紀の古典時代を現出したのであるが、それにつゞいた十八世紀に於ては、自然は再び忘れられかけた。似而非古典主義時代がこれである。即ちこの時代にあつては、自然からは遠のき、人工的な、虚飾に彩どられ塗りつぶされた文化が打建てられた。そしてつひ

にその世紀の末に、彼のフランス大革命の第一の呼び聲として、ルウソオが起ちあがつたといふ順序になるのである。

私たちはこの章では、人間對自然の歴史を要約して來たのであるが、それが同時に、人類文化史に對して自然が如何なる役割を果たすものであるかといふ第一章の所論を、重ねて立證することにもなつてはゐないであらうか。

さてルウソオの後、文藝史的に言へば彼のロマンティスムに於て、人々は目醒ましくも自然を開拓して行つたのであるが、ロマンティスムの功績の主なるものは、文藝史上極めて常識的なことではあるが、第一に、自然の發見、第二に、自然のなかにそれとよみに働いてゐる人々の生活の發見である。すなはち、この時代になつてはじめて、文藝の取材する領土が、それまでの宮廷の生活、騎士の生活、僧院の生活、貴族の生活などから、まつたく民衆のなかに擴げられて行つたのである。かくて田園に働く農人が、海洋に働く海の勞働者が、都市の浮浪漢が、文藝のなかにその正當な容姿をもつて描き出されるよう

になつた。これまでのいづれの時代の文藝を見ても、正當な姿に於ける農人及び農人生活は描かれてはをらない。十七世紀の文藝に稀に農人が描かれてゐるかと思へば、それは戯畫化されて、嘲笑の對象物として描かれてゐるに過ぎない。主役として農人が文藝のなかに登場し出したのは、まづたくロマンテイスムからの事實である。

第三は、この要求が時間的に中世の生活に向けられて行つたことであるが、第四は、この要求が空間的に、地平線を越えて、見知らぬ國土、遠い異國にまで憧憬を燃やして行つたことである。かくてサン・ピエ、ルは『ポオルとヴァルジニイ』に熱帯地の自然を、シヤトオブリアンは『アタラ』にアメリカ新大陸の原始的大自然をまづ先んじて描いた。これは、異國情緒と呼ばれるところのものである。

即ち、自然、そして現實の田園、農人の生活が、文藝の對象として選ばれるようになってのは、この十九世紀初頭に始まつてゐるのである。これ以後現代まで、この自然、そして現實の田園、農人の生活に對する文學者の態度なり、その成果なりについては、千姿萬

態であるのであるが、この小冊子では、特に田園に對して關心を持ち、その關心に終始した文學者についてだけ、比較的詳しく、章を改めて書くつもりである。

私たちは、これまで西歐に就いて見て來たのであるが、今度はわれ／＼の日本に就いてこれを見てみたいと思ふ。

さて、日本の最古の記録である古事記によれば、われ／＼日本人が如何に自然に對しての愛を深く持つてゐる民族であるかといふことが、いまさらながら肯づけられる。彼等は自然と共に住み、自然と共に生活し、自然と共に働いてゐる。彼等は、人間の生活を離れた自然を觀なかつたのである。同様に、人間の生活を離れた神をも觀なかつた。自然は、我等にとつては人間生活の一部分であつたのである。そして人間と、自然と、神々との交響の繪巻が、一卷の古事記をなしてゐるのだ。後に、日本人は、佛敎と儒敎とに深く根底的に影響せられて、それによつて日本民族の特質は大部分形づくられてしまつたのである。

が、この古事記時代には、まだそれらの影響はなく、自然はまつたく彼等の奔放な、男性的な、強靱な、生活意慾の源泉となつてをつたものゝやうである。

萬葉集をとつて見るといふ。自然に對してわれわれの祖先が持つた深い愛は、遺憾なく窺ひ知ることが出来る。古來わが國の和歌は、紀貫之が古今集の序に、

花をめで鳥をうらやみ、かすみをあはれば、露を悲ぶ心、こと葉多くさまざまになりける。

と言つてゐるやうに、その始源を自然に對する愛であるを觀てさへゐるのである。いづれの歌集を見ても、その大半は四季の歌、即ち四季さまざまの自然に對する情感をうたつてゐるのである。

この自然に對する愛の深さに於て、日本人は世界中にたぐひない民族であると私たちは考へてゐるのであるが、夏目漱石氏もその『文學論』の中で『吾人は上代より習慣性に支配せられて、天地風月を以て文學の大部を構成せらるゝものゝ信じ、いざ詠歌作文となれ

ば、自己の趣味あると無きとを問はず、草露蟲聲白雲明月を排列して云云。」と言つてゐる。『文學論』を引用した序に、次の遇話をこゝに轉載して見よう。

「嘗て彼地（イギリス）にありし頃、雪見に人を誘ひて笑を招きし事あり。月は憐れ深きものと説いて驚かれたる折もあり。或時は知人に、何故庭中に石を据ゑざるやと問ふて、「据ゑてくるゝ人があるとも、直ちに庭外に運び棄てる覺悟なり」この返答を承はつたる事もあり。或時は路傍の松樹を指して、同行者の時價若干と尋ねたるに、其男五磅位と答へたりし故、日本にては王侯の邸宅を飾るに足るを、安きものかなと感じたり。あとにて聞けば五磅とは、庭樹としての價ならず、材木としての價なりし由。蘇國に招待を受けて逗留せるは宏壯なる屋敷なり。ある日主人と果園を散歩して、樹間の經路悉く苔蒸せるを見て、よき具合に時代がつきて結構なりと賞めたるに、主人は近きうちに園丁に申しつけて此苔を掻き拂ふ積りなりと答へたるを記憶す。」

『源氏物語』の戀愛の描寫を見ても、自然は常に同時に描かれてゐる。その戀愛は「何

心なき空の景色もただ見る人から艶かに見ゆる曙」であつたり、「月かけに靡きたる藤の風につきてさこ匂ふ四月」であつたり、或は、「つれづれと降りくらししめやかなる宵、時雨うちしてもあはれなる神無月……」であつたりするのである。これは西歐の文學にてはそのたくひを見ないのである。

かの能因法師が、月光をめでてその庵の廂をわさく破つたなどいふ話を、西歐の人は果して理解するであらうか。謡曲の『雨月』には、西行法師が宿りをとつた家の老いた夫婦が、『姥は元來月に愛で板間も惜しと軒を葺かず、祖父は秋の村時雨、木の葉を誘ふ嵐までも音づれよとて軒端葺く』とて互ひに諍ふといふやうな話さへ語られて居る。

願はくば花の下にて春死なん その如月のもちづきのころ

佛には櫻のはなを奉れ わがのちの世をひととふらはば

これは、西行法師の歌である。

われ／＼の祖先が自然に對する深い愛を物語る文獻は、數限りなく求められるのであるが、それはこれ位にして置くことにする。兎に角、日本人の家屋と西歐人の家屋とを比較して見るといふ。西歐人の家屋が四面を壁に固めて窓を開くのに比して、日本人の家屋は、壁はただ二面、二面は全くの明け放し、ただ外の自然とは紙障子をもつてへだてゝゐるに過ぎない。寶を藏するには別に土藏を建て、人々の日常の住家は、かく半ば自然のなかにをるやうな状態なのである。

さてそれならば、日本人にとつて自然は、そして自然に對する日本人の愛は如何なるものであつたであらうか？ 如何なる態度で自然を愛するのであらうか？ 問題はこゝに移る。

古事記、萬葉の時代以後、佛教儒教渡來以降の日本人は、根柢的にこの佛儒兩教の影響を享けてをるやうに觀られる。日本人の民族性をこれほどまでに特性づけたものは、この外には絶對にない。

萬象は無常である。そしてこの無常の力の前には、人間の力はあまりにも弱少であると思ひあきらめる消極的な人生觀、涅槃を思ひ、解脱を欣求する安心立命の哲學、所謂、諸行無常の思想である。過去の日本人の根本的な思想はこれだ。かの駒爛極まりなき平安朝の榮華時代の頂點を示す『源氏物語』を觀ても、その底に流るゝ思想は、萬象の常無さ、そして人生のはかなさを唄つてゐるものに外ならない。江戸爛熟の放膽な肉慾世界を繰り擴げた西鶴が『一代男』を觀ても、そこに底流するところのものは、また如上の思想に外ならない。『平家物語』及びその他の軍記物、近松の心中物に到つては、言はずもがなである。

過去日本人の思想は、要約すればこの佛儒兩教の思想である。されば日本人が自然を觀る眼は、自然を觀する心は、さいふよりも日本人にとつての自然は、何よりもこの諸行無常の姿をはつきりと語つてくれるものであらねばならぬ。されば音もなく落つる桐の一片は、世の秋を聽かせるのである。そして日本人は、そのつねにうつろひ行く自然の事象に

對してこそ、涙ぐましい法悦を感じて來たのである。いづれの歌集にも四季の歌が大半をなしてゐるとさきにも言つたが、日本人の觀する自然は、四季つねにうつろひ行く自然の姿なのである。自然に對する日本人の愛は、つねに刻々にうつろひ行く、常無き自然の姿に對する法悦であつたと觀てよろしいと私は思ふ。

されば枕の草紙の作者は、

頃は、正月、三月、四月、五月、八月、九月、十二月、すべて、折につけつゝ、一年乍らをかし

と言つてゐるのである。

されば『花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは』と言つた兼好法師は、さらにつゞけて、

望月の隈なきを千里の外迄ながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いとふかうすみたるやうに、ふかき山の杉の梢に見えたる、木の間のかけ、うちしぐれたる

村雲がくれの程、またなくあはれなり。椎紫、白樫などのぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ身にしみて云云、

と言つてゐる。

花散らで月は曇らぬ世なりせば　ものを思はぬわが身ならまし

これは西行法師の歌である。

ありとてもたのむべきかは世の中を　知らずるものは朝がほの花

と、これは泉式部の歌である。

かうした日本人の情感の一つのあらはれとして、文藝に描き出され、唄ひ出された自然の姿に、無常の極點の姿、即ち荒れ果てゝ見るかげもなくなつた廢墟的自然を選ぶ傾向が強かつたことも見遁してはならない。力強い、雄渾な自然の姿は少く、多くは「淺茅ヶ原となりける」自然、「八重葎茂れる」園、笈の音のみが聽える山中、さいふたぐひである。「平家物語」をはじめその他の軍記物、論曲、淨瑠璃の文章には、いたるところにこ

れを見る事が出来るのである。

日本人にとつては、自然はつねに無常の姿を物語るものであるが、そこに燃えるやうな法悦を感じた日本人の自然愛は、それなら、どう説明してよいのであらうか。すでに日本人にとつては、諸行は無常であり、人間の力はその前にあまりにも弱いといふ悟諦が根柢になつてゐるのであるから、その姿をかくも如實に、かくも微細に——こゝで私たちは、島國である日本の氣候が、大陸的でなく、非常に細かい變化のあきを見せて行くといふ科學的な考察を忘れてはならないと思ふ。——明示する自然の懐には、彼等是一種の法悦をもつて抱かれに行くのであつたを考へられるやうに私たちは思ふ。

されば最も強くこの無常を感じた者こそ、最も深く自然の懐を求めて行つたのである。最も強くこの無常を感得した者として、私たちは、「花散らで月は曇らぬ世なりせば、ものを思はぬわが身ならまし」と唄つた西行法師と、「ゆく河の流れはたえず」と道破した

鴨長明とをあげることが出来るが、また最も深く自然の奥にわけ入り、その懐に抱かれた者としても、『山家集』の作者、『方丈記』の作者をあげることが出来るのである。

しかしながら注意すべき點は、彼等はそのため市井を捨てゝしまつた。人間の共同社會即ち浮世のことを捨てゝしまつたといふことである。浮世を捨てゝしまつて、所謂、隠遁をしたのである。この點が、彼等が日本のルウソオにまでなれなかつたところ、日本のトルストイにまでなれなかつたところ、言葉を換へて言へば、彼等がかくて自然の聲を正しく聴きとることによつて、在來の文化を變革し、革命しようとする意志にまで、自らを高めることが出来なかつたのは、到底彼等が、完全に佛教の影響圏内から踏み出すことが出来なかつたといふことになるのだ。彼等は佛教的思想の外に、赤裸になつて自然の語るところに聴くことが出来なかつたのである。この點、彼等はいかにも日本人らしい日本人であつた。

とは言へ、一卷の『山家集』を、一卷の『方丈記』を手に縋いて見るのもいゝ。自然を

唯一の慰藉者として、そこにこの世ながらの西方淨土を、涅槃を打建てようとした、いかにも日本人らしい人生記録を、諸君はそこに見出すであらう。

日本人はかく、自然に對しては極めて微細な觀照をし、自然に對してはかくも深い愛をもつてをり、そしてそれを文藝のなかに表現するこゝをも充分になし遂げて來たのであつたが、けれども、この自然と最も近く生活をしてゐる人々、即ち田野人、農人についてはいさゝかも語つてはをらない。

けれども、これは西歐の文藝と略同じ経路に於て文藝が發達して來たからで、これを不思議とするのも何でもないが、西歐にあつては、十八世紀末から十九世紀の初頭にかけてのロマンテイズムの大運動によつて、田園生活及び農人が主要人物として文藝の舞臺に登場したのであつたが、日本ではこの事實に比すべきものがないのである。

しかし日本にあつても、文藝が貴族、僧侶、武士などの特權階級の手から、まづたく平民の手に移り、その取材する世界も、まづたくの平民の生活を選ぶようになった文藝史上

の目醒ましい事實がある。即ち、江戸文學がこれである。元録から文化、文政にかけての江戸文學がそれである。けれども、その江戸文學を調べて見ても、描かれてゐるものは悉く町人の世界であり、一人の農人の影も、一場の田園の情景もそこには見出すことが出来ない。

それゆゑ、明治になるまで、日本の文藝のなかには、田野の生活も農人も存在してゐなかつたと言ふより外はないのである。

三 田園の形態とその特質

一口に田園或は村落と言つても、その形態、構成を異にするものが多い。こゝでは、この村落の各様式、即ち如何なる形態に近世の村落といふものは分類せられるか、そしてそれらの起源、及びそれらの特質について言及してみたいと思ふ。

村落研究の權威者である小野武夫氏は、近世村落をその成立原因から六種類の形態に分類してゐる。第一は開發新田村、第二は隠遁百姓村、第三は寺百姓村、第四は豪族屋敷村、第五は名田百姓村、第六は古代成立農村、これである。

開發新田村とは、言はゞ新しい分村である。古來わが國の村落は、一處に密集してその近在の田野を耕してゐたのであるが、戸數人口の増加につれ、田野の不足を感じ出し、遠くの山野にまで耕作に出掛けなければならなくなつた時、最初は堀立小舎の農舎を作つて

そこに出張してゐたのが、つひにはそこに本當の住家を建てるやうになつてしまつた。そして出來た村落がこれである。今日××新田、○○新田といふ名のつく村落は到る處にあるのであるが、それらはまづこの開發新田村と見てよい。そしてその×××か○○とかは、凡ねそこの開發者の名をとつたものであると見てよい。

第二の隱遁村とは、封建時代藩主の過酷な徴税に堪へず、藩役人の目のとどかない山間僻地に逃げ隠れた人々の村落である。即ち徴税を免がれて貧しい百姓が山の奥へ逃げ込んでこしらへた村落である。或はまた、戰國時代に、敗軍の落武者の群が逃げ込んで、そのまま土着してつくつた村落もこのなかにはあつた。しかしこれらの村落は數に於て極めて少數であるやうである。

第三の寺百姓村とは、有名な、或は多くの土地を所有してゐる寺院を中心として出來た村落である。徳川時代、藩主は寺院を建立すると、それに廣大の土地を所有財産として寄與するところが珍しくなかつたが、俗にこれを寺屋敷と稱し、その小作人を屋守と稱して

るたのである。或はまた茨城縣の某村には、眞言宗の巨刹があり、その寺の附近の住民を門前百姓と言つてゐる。そしてこゝの門前百姓は、昔、住職の出入には輿を昇いだ言はれてゐる。これら門前百姓は、かの高野山や普通寺のやうに參詣人を相手として生活するのではないが、寺院を中心としてその村落を形成し、その精神生活の根柢はやはりその寺院にあつたのである。

第四の豪族屋敷とは、中世莊園制度の發達した頃から各地に小領主が現はれ、それらは小高い處にその邸居を定め、その下に番卒のやうに農家を置いてゐたのであるが、その形態がそのまゝ殘存してゐるものを言ふのだ。關東ではこの種の村落を根古屋と呼び、現に東京市外馬込村にはさういふ字がある。九州薩摩では郷士の住家は小高い丘の上にあり、百姓の家はその丘の周りに散在してゐる村があるが、それらも一種の根古屋村である。

第五の名田百姓村とは、由緒正しい家柄またはその地方の有力者が、藩主にその地の開墾の特許を受け、數十の百姓を引連れて開墾に従事せしめ、それが成ると自らその村の長

さなり地主となり、そしてそれら百姓がその小作人となつて形成した村を呼ぶのである。

第六の古代成立農村とは、前記五種のいづれにも屬してをらない、しかもその歴史の甚だ古いものゝ總稱であつて、これは幾内地方には特に多い。しかしこの種の村落も、昔に溯れば一種の新田村に相違なかつたのであらう。

さて、村落の種類の方方として、別にこれを地理的狀態によつてわけることもある。山間の村落を山方村落、平野のを里方村落、海邊に近いものを浦方村落と分けることも出来る。

また村落の位置状態によつて、道路または河川に沿つてゐるものを沿道村落。神社または寺院を中心として成立してゐるものを環狀村落。寺百姓村または豪族屋敷村は大抵これに屬してゐる。海邊にあつて急傾斜地にあるか、または水害を避けて山腹に營まれてゐるかするものを階段村落。最も普通な村落であつて人家密集してゐるものを參雜村落。人家が此方彼方に散在するものを散居村落。一豪家の附近に少數の農家の集つてゐるものを田

莊村落。斯の如く觀察の方法によつては様々な類別が立つのである。

その成因及び形態よりすれば大體左の様な類別がなされるのであるが、最も意味のある分け方、その社會生活に最も重大の影響を及ぼす點からの考察としての分け方としては、二別して、疎居的村落と密居的村落とに分けられる。

疎居的村落とは、説明を要するまでもなく、山野の中に點々として散在して居る村落であつて、數より言へば甚だ少いやうである。

わが國の村落は、大體に於て密居的村落である。それが、何故にそうなのであるかは、興味ある考察であり、これは同時にその特質に言及することにもなる。

第一に、外敵に對する防衛のために一處に集合したといふ事である。泰平の世は問はず彼の戰國亂麻の時代には、村に侵入して危害を加へる不逞の徒、強盜、或は野武士の類が絶えず出沒してゐたのである。人間ばかりではない。地方によつては恐しい野獸も跳梁してゐたのである。是らの外敵に對して人々は、一處に相寄つて相扶けねばならなかつた。

第二に、我が國の農人は水田に稻を培ふのである。むしろそれが主であり、畑の耕作は副である關係上、農人の仕事場は水陸二ヶ所に分たれて居る。さて住居は濕氣の多い水田の上に建つる事はしなかつたが、けれどもそのためあまり水田から遠ざかる事は不便であつた。こうした關係上、大體に於て、水田から遠くない陸地に、人々は相集まつて住居を定める傾向があつたのである。

第三は、すでに村落の成因について述べた通り、或は寺院を、或は豪族の邸居を中心として成立した場合が少くないのであつて、勢ひ、村落は密居的になつたのである。

第四に、これは田舎人に限らず、人類の共通の性質として、孤獨よりも集合を愛し、社交的生活を愛する本能から、勢ひ密居的にならざるを得ないのである。

右のやうな理由をもつて、我國の村落は大體に於て密居的であるが、然らばそれが村落生活に如何なる影響を及ぼして居るのであらうか。それについて語らうと思ふ。

廣大な原野の中に一處に人々が相集つて村落をかたちづくり、まづ自然の暴威に對し外

敵に對し、野獸に對して、相扶け合つて生活を營んで來たものであるから、自然、村落には共同共存の精神が濃厚である。大小吉凶に拘らず、村人は一家の者のやうに互に助け合つて來たのである。すべてが共同的である。例へば、彼等の間に發達した娛樂、藝術を見ても、一として團體的でないものはない。舞踊を考へても、さまざまの名のつく各地の舞踊は、いづれも衆人舉つてともにするものでないものはない。音楽にしてもさうである。

風呂が涌けば板木を叩いて、附近の人々が相寄つて浴する。交際場としては寺院があり泉がある。この泉若しくは川は、如何なる他の成因の相違にも不拘、大體に於て村落成立の根本的のものである。古來人類は水を求めて、はじめてそこに居を定めたものである。

「泉」ミ名のつく村落の如何に多いかを思へば、思ひ半ばに過ぎるであらう。

この村落に見る共同共存の精神は、近代の個人主義思想の極度の發達の爲めに、或は崩壊し去つたかのやうに見られない事はないが、それは誤である。勿論現代に於ては、昔日のやうな發現形式は持たない。或は他の理由から、表面全然それと悖る行爲が現在なされ

て居るのも事實である。然しながら、村落生活が共に自然を相手として爲されて居る限り、この共同精神は、他の如何なる人々の間よりも、彼等に濃厚である。自然は平等である。雨來れば全地濡ふ。旱すれば全地乾き、暴風來れば全土脅される。そして彼等の生命であるその農耕作物は、その同一な自然の手にまかされて居るのである。雨、風、旱、洪水、思へば農人は太古より今日に到るまで、この共同の暴威の前に、いかに共同の力を擧げて來た事であらう。そして今日、或は明日、そして永遠に、この自然の平等さが存続する限り、田野生活の共同共存の精神は失はれることはないのである。この精神、人類が他日如何なる形態の社會を形り出すとしても、この精神こそは、永遠に、人類生活の基幹となるべき大精神でなければならぬ。

交通の行はれざる徳川時代にあつては、村落内に於ける親密、協同のあまりにも濃厚であつた結果、他の村落と能く親しまず、ミもすれば一村割據の風をなしたらしく歴史は語つて居る。然り、かくまでに一村の内は協同的であつたのである。

四 田園及び農人の歴史

——これを經濟史的に見る——

この章では、日本の田園及び農人の歴史を簡單ながら經濟的見地から見てみようと思ふのであるが、この歴史を物語ることは、田園の悲慘極りなき繪巻物を繰りひろげることになる。私たちはそれを正當に見てもらねばならない。田園讚美論者であればなほさらること、この過去の私たちの田園の運命を正しく識認しなければならぬのだ。この事實に面をそむけての田園讚美は、貴人の夢でしかあり得ない。

わが國は古來、豊葦原瑞穗國と稱せられ、五穀豊饒な國であり、國人は主として農耕に

従つてゐた。太古に於ては、農人のみが公民と認められて居つた時代さへもあつた。

萬葉集に乞食の詠といふのが二首ある。一は漁人を歌つたもの、他は狩人を歌つたものである。これは國文學者の解釋に従へば、漁人も狩人も共に漁肉獸肉を供給する、しかしそれらは主食物ではなく副食物であつた。主食物は農人の供給する五穀であつた。そこで彼等漁人や狩人は「乞食」と呼ばれて居たのである。即ち、喜田貞吉博士によれば食物を生産する農民が公民であり、副食物を供給する漁人狩人は非公民「乞食」であつたといふのである。

そして農人のみが國民のうちの公民として、最も有力な集團であり、従つて最も高い生活をして居た人々であつたといふことだけは學者の確認して居るところであるが、その詳細はこれを文獻に求めることが出来ないものゝやうである。

太古はこれを詳細にしないが、王朝時代となるに比較的文獻が豊富になつて來てゐる。こゝで大體西岡虎之助氏の集められた材料によつてこれを紹介したいと思ふ。

王朝時代に於て農業が最も重要視されてきたことは、當時の詔勅や官符のうちに「國を經むる要は農耕これ勤む」(三代格弘仁十二官符)「王政の要、生民の本はただ農を務むるにあり」(三代格仁壽二、四官符)「農業を勸督するは王政の先にする所」(政治要略、延喜八十一官符)といふやうな文字が發せられてゐるによつても知られる。このやうに農が重んぜられたのであるから、農人が重んぜられて居たことは勿論である。のみならず當時の政治は「民はこれ邦の本なり、本固ければ國寧し」(桓武紀、延歷三詔)といふ一種の民本政治であつたから、この方からも農人は重要視されてゐたに相違ないのである。

しかるに、聖武帝の天平七年には、「朕、卿等を選び任じて國司とせり、然るに條章を奉ずる者僅かに一兩人あるのみ、而して人は虚事を以つて聲譽を求め、或は公家を背いて私業に向ふ、此によつて比年國內弊損して百姓困乏す」(聖武紀)といふ詔勅を私たちは見る。即ち、この時代に到つて、そろ／＼地方官の荒政が頭をもたげ、そして農人の困乏の歴史の幕が同時に切つて落されるのである。

農人の歴史を書くことは、一に、農人の困乏史、農人の虐殺史、農村搾取史を書くことに外ならないが、早くもこの當時からこの頁は開かれるのである。

當時の地方長官が貪慾飽くなく、さまざまの悪手段を構じて農人の利益を奪取した事實は『今昔物語』一巻を繙くことによつて明かに觀取せられる。この暴政に堪へかねて、農人がしはな／＼その田野を捨て、他國に逃亡し、田野をして荒廢に歸せしめた事實は、非常な數にのぼつたものと見られてゐる。

○○天皇の御代に○○の○○と云ふもの有けり。年來舊受領にて、官も不成で沈みわたるける程に、辛くして尾張の主に彼成たりければ、喜びながら任國に急ぎ下りけるに、國皆亡びて田圃作ることも露⁺无かりければ、此守本より心直くして、身の辨なども有ければ、前々の國をも吉く政ければ、此の國に始めて下て後、國の事を吉く政ければ、國只國にし福^として隣の國の百姓雲の如く集り集て、岳川とも不云ず、田圃に崩し作ければ、二年が内に吉き國に成にけり。

これは『今昔物語』廿八の四節から引用したものである。それからこれは農人ではないが、能登の國の光の島といふ浦の海人が鬼の寢屋島鮑を取つて國司に納めることを常としてゐた。しかるに「藤原通宗の朝臣と云ふ能登の守の任畢の年、其の光の浦の海人共の、鬼の寢屋に渡つて返つて國の司に鮑辨けるを、強に責ければ、海人共詫て越後の國に逃て渡りければ、其の光の浦に一人の人无くて、鬼の寢屋に渡つて鮑取る事絶にけり」といふやうな事も書かれてゐる。

したがつて稀に善政を敷いた國司があれば、農人の崇尊はその極に達した。讃岐の守に任ぜられた藤原保則の如きはこれで、任を去るに臨んで國人の哭聲千里に達したとまで言はれてゐる。

さて概括的にいつて、當時の農人の文化の程度は、極めて低いものであつた。宮廷及びそれを繞る貴族の社會には、異國の高い文化の移入があり、その結果として大化の改新、大寶令の制定などを見て文化は向上したのであつたが、農人の生活には何等加ふることがな

かつたやうである。

その生活内容、苗代のこと、農具などに就ては、大體今日のそれと類似して居つたやうであつて、農人は糙米（玄米）を煮て食し、また焼米、糯等として用ひてゐた。ただ「年の春米」と云つて玄米を精白にして京都に送り大炊寮に納めるのであつた。米よりも貯藏に堪へる麥を作ること、當局は勵めたといふことであるが、農人は餘り好まなかつたやうに文獻は傳へてゐる。とは云へ、陸田には麥、黍、粟、稷、蕎麥、大小豆、大角豆、胡麻、蔓菁、蒜、韭、葱、蒨、薑、蒟蒻、瓜などの作物を耕つたとある。

そして農人は常に「無知の愚民」(聖武紀、天平、九、詔)「無智の百姓」(光仁紀、寶龜、十四、詔)「庶民の愚」(仁明紀、承和、七、勅)「愚暗の民共」(清和紀、三代格)などと呼ばれてをつたのである。

當時農人を苦しめた者に「出舉」いひふものがあつた。これは、稻とか錢とかの貸付を指すのであつて、最初は貧民救済の目的であつたのが、地方官の姦惡、富豪階級の貪欲の

ために、農人を苦しめるところのものとなつたのである。即ち農人が困乏の極、當座の凌ぎとして高利をも顧みず稲や錢を借りるのである。その高利なことは、例へば八兩の綿を質貸して十兩にして責取り、或は小斤で貸した稲を大斤で償はしめ、或は信濃國小縣跡目里の富人他田舎人蝦夷は、錢稻の出擧には輕斤を用ひ、徵收に當つては重斤を用ひたなどといふ。當時の證文には利子が年十五割以上なのが通例になつてゐるのにも見ても、多く語るを要しないであらう。紀伊國名草那三上村の百姓が、二斗の酒が返濟出来なかつた爲めに、死後牛に生れ代つてその爲め八年の勞役に服したといふことが『靈異記』には語られて居る。

さて鎌倉時代が、足利時代、戰國時代、織田、豊臣の時代、この戰亂時代に入ると、農人はどうであつたか、想像するに難くない。こゝでその大要を、主として花見朔巳氏の研究によつて紹介することにしたいと思ふ。

戦亂につぐに戦亂をもつてし、即ち農人の生活より言へば徴集につぐに徴集をもつてし、しかもその田野は絶えず馬蹄に蹴散らされた、この時代の彼等の生活が、いかにみじめな、生活の安全さへおぼつかない有様であつたことか、私たちはこれを想像するに難くない。そしてこうした長い時代にわたる不運の結果、後にかの徳川時代の酷政にも、彼等が黙々として堪へ忍ぶことの出来た彼の驚嘆すべき忍従性が、つちかわれたのではあるまいかと、私たちは考へる事が出来るのである。

當國の麥稻田畠の乾熟を敵方には積りて寄せ來、狼籍を宗として濫妨を事とするに
よつて、農の隙を奪はれ、作毛を損はれ、大小上下困窮する故に、路頭に死人多し、
今天下大いに亂れて、何國も同じことなれども、其死するもの、半過て饑者する者、
領主いづれも無益の事と思ひて、耕作を勸むる心なき故なり。

『清良記』にはかく語られて居る。農人のうちにはそれゆゑ、土着の土地を捨て、平和な地に逃亡する者が續々と出て來た。この農人の逃亡は、領主よりすれば大事件であつた

から、いづれの領主も極力それを防止し、既に逃亡した者をも、有利な条件を與へて呼び戻さうと力めた。

これらの逃亡農人を、當時「走百姓」と呼び、歸國した者を「歸參百姓」と呼んで居たといふ。もつて如何にこうした現象が甚しかつたかを知るべきである。農人は安住の地さへない哀れな漂泊人であつたのである。

さて當時の農人と武士との關係について述べたいと思ふが、當時代の武士といふものは、文献によれば、後の徳川時代の武士とは異り、即ち常備兵としての形式に於てではなく、平常にあつては野に歸つて農に従事して居つたのである。彼の謡曲の『鉢木』にある佐野源左衛門のやうに、常には田野にあり、一朝事ありと見れば直ちに甲鎧に身を固めて馳せ参じたのである。

この事實の一面には、農人であつても、腕の出来る者は續々と起ちあがり、軍に馳せ参じ、その功績によつては重く用ひられることがあつたと云ふ事實を含んでをるのである。

したがつて、この時代にあつては、農人は殆んど武を修め、それによつて立身の道を望んでゐた。農人が武を修めてゐたといふことは、少々不思議にも思はれるが、戦亂の時代であれば、社會の秩序はまったく破壊せられてゐたのであるから、その間にあつて生命財産を守るためには、農人自ら武を修める必要が大にあつたのである。

この時代には、それゆゑ、農人の間から出でて大功をたて、ほんたうの武士に立身出世をした者も決して少くはなかつた。かういふ風潮は、やゝもすれば、無智な、そしてほんたうの武士的訓練のない農人をして、暴徒の擧に出でしめることが多かつたのである。この弊害を先づ見てとつたのは、豊臣秀吉である。即ち、天正十六年令を發して、民間の刀劍、鎗、鐵砲、その他すべての武具を悉く徵集してしまつた。所謂、秀吉の「刀狩」となつてあらはれたのである。

この「刀狩」によつて、全國の農人の間から、秀吉は武具を奪ひ取つてしまつた。そして以後、農人が歳具に手を觸れることを固く禁じた。このことは、武士階級と農人階級と

を全然分隔してしまつたものであり、秀吉はこれによつて、一つには、農人をして専念、農事に當らしめて、泰平を實現せんとしたのである。柴田勝家の如きも、秀吉に先んじてこの刀狩を行ひ、徴集した武器のうち不良なものは鍛匠をして農具につくりかへしめて、これを農人の間に與へたといふことである。

武器を奪取して農人をして専念農事に従はしめた秀吉は、次に、彼の有名な檢地を試みた。漸く、中央集權の政治が芽をふいて來たのである。

全國的に檢地をし、賦課の標準を定めることに、秀吉は異常の精力を傾倒し、その成るや、彼は天下に向つて大に農を勧めた。

『清良記』とは瀧本誠一博士の説によると、永祿の頃伊豫の人松浦宗案がその主土居清良の質問に答へた意見を記したもので、わが國で最初の農事意見書であるが、そのなかに當時の勸農の精神を瞥見することが出来る。

不上分の農夫は欲_レ前_ニ慈悲_一、不_レ欲_ニ無益殺生_一、欲_レ本_ニ正路_一、不_レ奪_ニ他人畔堺_一、

欲_レ心_ニ崇敬_一、不_レ欲_ニ夫婦諍論_一、勸_ニ辨時節_一、不_レ違_ニ相應種實_一、撫_ニ育萬作_一、不_レ究日夜身樂_一、

かゝ事を心に怠らず、神祇を崇祭、公義を恐れて法を不_レ背、次に五穀を時節相應に仕付、小作とて菜園をよくし、妻子には諸菜の取りやうを教へ、次に大作とて木竹を植て實を取入、家の修理にもつかひ、次に野竇とて牛馬を持ち犬猫鶏を飼、猫は鼠の押へ、犬は火事盗人の用心、鹿鬼の作を荒すを防ぐため、鶏は時を知るため、次に下人子供を扶持すべき心おこたらずして、賄をつよくし、次に公事喧嘩をせず、見物好色を禁め、次に居所衣食を恣にせず、次に氏系統だてをいはず、次に魚狼漁を不_レ好、此等五つのせぬ事をせずして上の五つに情を強く入、諸事儉約を本として、鯨寡孤獨を憐み、夫婦順熱するを、上農の大筋目の心持に致し候

と、こうし一節がある。こうしてひたすらに農人をして業務に専念せしめたのである。

なほ同書には、さらに、

具足、甲に似たる養笠を着て、大刀、刀に等しき鎌、鍬を持ち、名馬の如き牛を追ひ、諸士にことならぬ下人子供を左右に立て、風雨寒暑をいとはず、人より先にと志所は、武家の戦場に赴く心に替事なし

と、狡猾にも最大級の讃辭を送つて、褒めそやしてゐるその實際は、收穫を多からしめて年貢の増收を目的とした政策に外ならなく、この時代には完全に、農人は納税機關としてより外には存在を認められて居らなかつたのである。

江戸時代になると、これは有名な農人搾取の名君輩出の時代である。

有名な本田佐渡守正信の著『本佐録』には、

百姓は天下の根本なり。不_レ飢、不_レ寒、困窮せぬ如く養ふべし

とある。農人はまつたく、人間としてではなく、農生産の機關として以外には認められてゐない。

百姓は天下根本也。これを治むるに法あり。先一人々々の田地の境目を能たて、扱て一年の入用作物を積らせ、其餘を年貢に納むべし。百姓は財の餘らぬ様に、不足なき様に治むる事道なり。

これも『本佐録』の一節であるが、この「百姓は財の餘らぬ様に、不足なき様に治むる」といふ精神こそ、江戸時代の農人搾取の根本精神だったのである。かくて農人は、飢えて死ぬことを免れる範囲内に於て、その生産物はことごとく搾取せられたのである。

ここで思ひ出されるのは、有名な家康の語として傳へられて居る次の言葉である。——
 『百姓の難儀になれば、難儀にならぬほどにして、氣儘をさせぬが、百姓共への慈悲なり。』
 家康の時代に胎生したこの思想を、江戸時代は、さらに徹底的に實行した時代に外ならな
 5。

さればこの時代の農人の貧窮を極めた運命は、かの數知れぬ百姓一揆と義民との目を奪ふ唐草模様を織り出してゐるのである。この徳川時代の百姓一揆については、ここでは物語

る頁をもたないが、世に既に莫大な大冊となつてこの歴史は書かれて居る。

この農人の牛馬の如き運命に、叫びをあげて幕府を弾劾した士も、したがつて、この時代の歴史を彩つてゐる。その典型的なものとして、關東の農人のために田中丘隅が、關西の農人のために熊澤藩山が、まづ聲をあげてゐる。藩山は武士階級の擯取思想を慨して、

今の世の武士の情は、民に不仁なるを以つて其道を得たりとし、仁なるをば其道を不_レ得とす。たま_レ民に憐ある人あれば、大いにそしり怒りて、「過悲に慈て百姓のみを惠み、家中にはおろそかなり。事あらば百姓のみ用に立べし」と嘲り、「百姓は富て奢」といひ、饑饉凶年にて、民に飢へたる色あり、奉公を望む者、男女となく道路に滿ち、「給分とらずとも仕へん」といへども、抱へ置く者なし。乞食、捨子多きを見て、不便といはず。國主、郡主、仁君にて、飢ゑを助け給ひ、もしは蕨の根を掘り草を食すといへども、乞食に出る者見へざれば「百姓共たくはへあれども、なき言にならずといふ」といひなせり。民はいかなる仇敵の末にてか、かく憎まるゝなら

ん。昨日今日まで同じ様に百姓を憎みし者も、郡奉行、代官となつて、目に近く民の困乏を見ては、あはれむ心出來て、昔の心を變ず、然れ共、多くの侍輩、組頭、用人の歴々に憎まれては、あしき故に、不便といひながらも、無是非人情にしたがふと見えたり。

と、『集義外書』にいつて居る。藩山はまた、

百姓は年中心苦して、作出したるものを、残らず年貢に取られ、其上にさへただずして、未進となれば、催促をつけられ、妻子をうらせ、田畠山林牛馬までをも、賣らせて取らるれば、其の百姓家をやぶりに流浪し、行方なきものは乞食となり、たまたま村里にはさまり居といへども、凶年には餓死をまぬかれず。甚しきものは、有無の差別をも知らず、水ぜめ、簀卷、木馬などの責をなす。これによりて病つきて死し、或は病苦になりて用にたゞざる者あれど、いむことなれば訴へもならず。凶年にて百姓の迷惑する時には、よき田地、山林、屋敷等を下直に買得しなどして、富人はいよ

いよ身代宜しくなるものあり。村里かじけて、取るべきやうなくして、免を下ぐれば富人も諸百姓につれて共に免下がりて、ますく富あり、此富有の民、五十家、百家の中に、一二家あるを以て、百姓ゆるやかにて、奢といへるなるべし。豊年には薪藁を賣り、木の實などを賣りて、何ぞの祝儀事には、酒肴を求る事あり。大勢の事なれば、一村より二人づつとても、城下の町にて見る時は、多きやうなり。此等を見ても、百姓は蓄へ有やうにいへり。彼も人なり。かやうの事までも、ならざるやうにと思へるは、あまり不仁なり。春より冬にいたり、明るより暮るゝまで勞苦して、武士を養ふものなれば、少し酒肴にても求むるを見ては、悦べき事なるを、武士の心下りて賤しくなりたる故なり。若き人は、幼少より見習ひ置きて、ただ如斯ものと思へり。心をつけて省みれば、恥かしき事ならん。風俗いやしき故なり。歎かしき事ならずや。

と言つて居る。言ひ得て躍如たるものがあるではないか。

田中丘隅は、享保年間幕府の支配勘定並に武藏國數萬石の地を支配した人であるが、その著『民間省要』には、口を極めて農人の悲惨なる運命を訴へて居る。

百姓といふもの、牛馬にひとしく、辛き政に重さ賦税をかけられ、酷き課役を當てらるゝといへど、更に云ふことならず。是が爲めに身代を潰し、妻子を賣り、或は疵を蒙り、命を失ふ事かぎりなしといへど、不斷、罵詈雑言に逢ふて生を過す。如何様の非道をして、官人となれば、一俵の米を取ても君風に誇り、民家へ出てはよく百姓を睨むに、かがむのみなり。……縦ば牛馬に重荷を負ふせて、打叩き、躓けば猶怒つて大鞭し、この畜生めと罵るが如し。言ふ事なく、泣く事なし。百姓相同じ。

(民間省要、卷二)

また、

田方に生るゝ百姓は、雑炊にても米を食ふことあれども、山方、野方に生れては正月三ヶ日といへども、米を口に入るゝ事なき所多し。粟、稗、麥などを食に炊くとて

も、菜、蕪、干葉、芋の葉、豆さゞげの葉、其外あらゆる草木の葉を糧として、穀物の色は見へぬばかりにして、而かも朝夕飽く程の事なく、漸く日の中一度宛ならでは之を喰ふ事なく、餘は前にいふ粥の類にて日を送る。朝夕の膳などに座るといふ事もなく、少し物をたべれば蟹の泡の如くなり、茶をいくらも汲飲んで足れりとす。斯く恐しき物を食として、而も明七つより起きて骨を折り、夜九つまで働きて繩をなひ、草鞋を造る。其辛苦常ならずば、一日もその内に住者あらんや。都に育ちては今様の咄だに、一生耳に聞く事もなき人は誠とも思はじ、都人にかゝる食事をあしらへば、鐵丸を食すと云共、一口も喉へは入らじ。(同、卷四)

そして「世を覆ひ國を治る人は、心を留てこれを聞き給はば、民を憐む助ともなりなん。此外國々を渡り、衣食住の哀さをいはば、誠に涙もとどめ難し」と訴へてゐる。

かく人畜はかち難い長い世紀の夜に蠢めいて來た農人であつたから、いふまでもなく、そこに文化などと言はるべきものはなく、その性質の如きも暗愚、固陋、頑濠を極めて居

たものと見え、例へば『民間省要』にも、農人の性情を叙して次のやう言つてゐる。

久しく邪に入りては、正法のことといへども、新規のことはたやすく得心せず。其國風其他ならはしに浸みては他の流を用ひず、且家業の耕作、田地のこしらへ、苗代より初めて、一切種物下し様に至る迄、只古來より仕來る事を用ひて、善といへど、惡を改めず、鎌、鋏、諸事の農具、以て同前たり。

さて私たちは、素描ながら過去を描いて來た。そして現在は何？ それは、詳しく言ふ必要はない。

冠をかむつた王朝時代の國司は、戰國時代に移つては甲冑に身を鎧つた英雄となつた。そして徳川の封建時代に入つては、駕籠に乗つた大名となつた。そして現代二十世紀に入つては、それは、自動車に乗つた資本家となつた。ただそれだけの事である。

資本主義文明は、田圃の血を吸ひつくし、その疲死した死骸の上に光り煌く都市を、い

たるところにうち建てゝゐるのである。或る言ひ方をすれば、今日までの文明の進歩は、この田園採取方法の進歩に外ならないとも言へるのである。

されば現代に於ける社會問題の主流は、この田園の問題の占めるところとなつてゐる。この問題から足を離れたあらゆる社會問題は、決して高い意味をもつものではない。

文藝の方面でも、この田園を幾重にも巻いた鎖をこきはなし、田園の眞の自由を樹立させやうとする運動は、澎湃たる勢をもつて興つて居る。私たちの農民文藝の運動もマルクス流の言ひ方をすれば、現段階の使命をこゝにもつ。

五 自然と徳

——サン・ヒエルの物語——

近代文學に現はれたる田園生活の諸様相について語る順序になつたが、さきにも言つた様に、まづ田園生活を繪畫的に描き出して見せたものは、サン・ピエルの『ポオルとヴキルジニー』である。

この物語は、一七八四年に世に現はれた作者の大冊『自然研究』の第四書をなすべきものであつて、作者は序して「私の欲したところは、熱帯地の自然の美しさによく調和してゐる團欒の徳行の美はしさを描くこゝにあつた。又同時に、多くの大きな眞理、自然と徳にしたがつて生活するところに、われ／＼の幸福が存するといふ眞理を、明かにしようと努力する事にあつた。」と言つてゐる。

ルウソオの『自然にかへれ』と言ふ哲學を、華かな繪畫にして示し、美しい詩歌にして唄つてみせて居るものである。

熱帯地の孤島に、一人の女の兒を腹に抱へた若い寡婦が、隱家を求めてやつて来る。彼女は、家庭の富が釣合はないと言ふ理由から相愛の男と正式の結婚が出来ず、ともに、この自由な、清新な原始島に渡つて來たのであつたが、不幸にして夫に死別した哀れな寡婦、彼女はここで一人の奴隸と共に地を拓いて生計を立てる決心をする。そのうち彼女は、はからずも、一人の男の子を抱へた寡婦に出遇ふ。相手の女も亦、不幸な結婚の後に、男の兒を抱へてこの島に渡つて來て居た寡婦、これも亦、一人の奴隸と共に耕作して生計をたてゝゐたのである。

この二人の寡婦の共同の耕作、それから彼女たちの二人の子、ポオルといふ男の兒とヴキルジニイミいふ女の兒との成育し行く姿、物語はこれである。

彼等は地味が肥えてゐる處には、小麥を、普通の處には黍や玉蜀黍を、沼地には稻を、

岩地には南瓜や胡瓜を、低地には甘藷を植ゑ、丘には珈琲を植ゑ、河邊と家のまはりにはバナナを植ゑた。

彼女たちは耕作の暇には木綿を紡いだ。それで彼等の衣服には足りた。彼等は家に居る時は跣足でゐ、日曜日に寺院に行く時だけ靴をはいた。同じ運命に導かれてかく一緒になつたこの二人は、姉妹の情に加へて、母親としての義務が、その共同生活の幸福をなほ高いものにした。子供たちの搖籃のところ、早くも彼等は子供達を夫婦にする相談をしたのである。

子供達はすく／＼と育つ。奴隸と共に畑を掘りかへしたり、小斧を持つて森へ出掛けたりするやうになつた。二人とも、何の智識もなく、読み書きも出来なかつた。自分達からは遠い、過ぎ去つた時代の出来事などは頓着をしなかつた。彼等の智識はこの山の中の外へ出なかつた。彼等には、この島の果てが世の果てであつた。お互への愛情、母親たちへの情愛、これが彼等の行への根本である。何の役にもたたない學問が、二人を泣せるやう

な事もなく、窮屈な人倫の教へが、二人を暗い氣持にさせる事もない。彼等は盗みをしてならぬと言ふ事を知らない。何事も共同であつたから。彼等は嘘をついてならぬといふ事を知らない。眞實の事を隠す必要がなかつたから。二人は寺院へ行つて長たらしい祈禱はしなかつたけれども、家でも、森でも、その汚れない兩手と、母親への情愛の溢れる心とを、天に向つて差出した。

彼等は森からいろ／＼な小鳥の巢をとつて来て移した。親鳥は雛のあとを追つて來り棲む。彼等は餌をまく。彼等の姿が見えると、可愛いゝ聲を出すペリカン鳥や、羽の深紅なカアジナル鳥などが、すぐさま巢から飛び出して來る。鷓鴣は草のなかを走り、燃えるやうな緑の鸚鵡は、棕櫚の樹に飛ぶ。彼等は、かくも無邪氣に人生の春を送りながら、徳行の下稽古をしてゐたのである。

さて歐羅巴人といふものは、小さい時から幸福に逆らはせるやうなさまざま／＼な偏見で心を満たされてゐるため、もとより自然が、かくばかりの智慧と喜びとを與へるものだとい

ふことを知る筈はない。歐羅巴人の魂は、狭い人間の知識の圏の中に閉ぢ込められてゐて、人工的な快樂の上に出るこゝが出来ない。自然はそれとは全く別で、自然の心は、疲れることがない。

ポオルとヴキルジニイは、時計も持たなければ暦も持たない。年代記も歴史もなければ哲學もない。自然の正しい變化が、彼等の生涯の一期々々を定めた。彼等は、木立の影で時間を知り、花時や果實の時で季節を知り、收穫の數で年を知つた。——晝飯の時間です、バナ、の蔭が木の根こもまで引込みましたから。——日が暮れます。タマリンドが葉を閉ぢますからと、彼等は言ふ。年齢を訊ねられれば、——兄さんは泉のほとりの大きな椰子の木と同一歳、私はその小さい方と同一歳です。私が生れてから、マンゴの木は十二度果がなりましたし、オレンヂの花は二十四度咲きましたと、答へる。彼等の生活は、樹木とかくも深い關係をもつてゐたのである。

彼等は、母親達の生涯の外に歴史的時期を知らず、果樹園のそれの外には年の數を知ら

す他人のために善行をし、神の意志に服するといふことの外に哲學を知らない。この二人の若者が、何がために金持であつたり、學者であつたりする必要があつたらう。かく二人の自然兒は生ひ立つたのである。

しかし、この樂園の生活を掻き亂すものがやがて現れる。巴里にあるヴキルジニイの祖母が、彼女に遺産を譲るといつて呼び返す。彼女はフランスに渡つて行く、ポオルは悲嘆にくれる。彼は自分も彼地に渡つて出身しようと志す。が、彼等の友達、近くの森の隠者は教へる。——いまではすつかり事情が變つてしまつた。フランスでは何も彼も金で買へるようになつてしまつた。今日ではいゝ地位はみな、上流社會の人々の手に歸してある。王様は太陽ぢやが、大官や貴族が雲のやうにその太陽を取圍んでゐるのぢや。一條の光線だつて、あなたの上になぞ落ちて來るやうなことはあるまい。……昔は王様は、徳のある人に氣がつけば、名譽ある地位をお與へになつたものぢや。けれども今日では、それは金でしか買ふことが出來ない。

歐羅巴つて何といふ國だらう！ ヴキルジニイは早く此處に歸つて來なければならぬ。金持の祖母が何にならう。こゝの小舎にゐて、頭に野の花をかざしてゐた時が幸福だったのだ。歸れ、ヴキルジニイ、あなたの宮殿と榮華とを捨てよしまへ！ この岩、この森かけ、この私たちの椰子の木の下に、歸つておいでなさい！ と、ポオルは岩かけに立つて叫ぶ。

ヴキルジニイは、けれども、この緑の樂園を戀ふて再び歸つて來る。しかし、彼女がその島へ、その自然の懷へ再び歸りついた時には、浪に漂ふ死骸としてどあつた。船が覆つたのである。

語られてあるものは、自然と人間との共存、共勞、共榮の生活であり、一方に、當時の社會の組織に對する痛烈極まる批評が掲げられてゐる。歴史的に見ればこれは、フランス革命の芽が漸く日光を吸つて伸びあがつた姿であるが、自然の運行に、人間生活の運行を合致させ、互ひに照明し合ひ照應し合つて行くところに、人類の文化の正態があることを

語つてゐる點に、これは私たちの未來の問題にも一つの鍵を掲げてをるものであると言はなくてはならない。

自然はその運行を、太古から、ゆるぎなくつゞけて來てゐる。そして人類は、そのなかに、生命と生活を託して來てをるものである。自然は人類生活の背景をなすものではない。また舞臺でもない。人類の生命と生活を託すべき、更に大なる、そして唯一の「生活」である。「生命」である。この生命に叛いた人類の文化は、砂上に建てられた樓閣に等しい。『自然にかへれ』といふことは、すべてこのポオルとヴェルジニイのやうに、原始自然状態にかへれといふことでも何でもない。また私たちは、原始にかへらうとしても不可能である。自然にかへるといふことは、私たち共同の文化を、この自然の大なる生命の上に打建て、行くことではなければならない。この「生命」には決して間違のないといふことをつねに信じなければならぬといふことである。

自然といひ、不自然といふは、要するに、自然界のことではなくして、私たちの人間界

徳と然自

の問題なのである。

六 自然に近く生活する

——トルストイの『コサツク』——

モスクワに於ける頹廢的な生活、——カツフェエ、酒、カルタ、賭博、情婦、借金、かういつた生活から逃れてオレエニンは、コオカサスの原野に、見習士官として赴任する。その途上、山々の美に打たれた彼の驚愕については、既に述べてある。

オレエニンは、コオカサスの原野に住むことになる。そのコサツク人やコサツク兵の自然とともに戯れ合ふ逞ましい生活のなかに、彼は驚きをもつて入つて行く。「山が、山が、山が、彼の考へたり感じたりするこんなことでも雜つて来る。」勇敢な、放膽な、粗野な、そして素朴な、そして純真なコサツク兵たち、獵師のイエロオシユカとが、いまはオレエニンの相手である。眞白な髻がもぢや〜と生へてゐて、赭黒い顔は老年と難儀

な生活から出来た深い皺で一ぱいである。脚や腕や肩の筋肉は、まるで若者のやうに固く、カチ／＼と肥え太つてゐる。たくましい首は牝牛のやうに皺でもつて掩はれてゐる。これがイエロオシユカである。

イエロオシユカは、まつたくの原始人である。オレエニンは彼と連れだつて、毎日のやうに山野に獵してこの原始人の息吹に觸れる。

——だが儂アどんな男だつたね、儂ア伶俐者のイエロオシユカさ。村の者ばかりにちやねえ。山の者にまで知られてたんだよ。韃靼人と一緒になりや儂ア韃靼人になる。アルメニア人と一緒になりやアルメニア人になる。兵隊と一緒にでは兵隊になる。士官と一緒にでは士官になる。だから皆がよく言つたものさ、「お前は身を淨めねえちやなんねえぞ、」つてね。……………だが儂の考へちや、神様は何だつて人間の樂みのために創つて下さつたんだから、どんなことにだつて罪なんかありはしねえ。早い話があの獸物だ、彼奴は韃靼の葦のなかにも棲みや、儂たちの葦のなかにも棲む。何處へ行つたつて行つたところが家

だ。そして神様の下さるものを食べるんだ。

イエロオシユカはかういつた男である。——何だつてね！ お前さんは獣物は馬鹿だと思ひなさるかね。どうして、獣物は人間よりやずつと慥巧だよ。彼奴等を豚つて呼ぶのは呼ぶ方が大馬鹿だ。彼奴等は何でも知つてやがる。早い話が、人間は足跡について歩いててもそれに気がつかねえやな。けれど牝豚は人間の足跡に出ツくわせば、直きそれを嗅ぎ出して逃げて行かあな。彼奴等に分別があるのはこれでも分る。人間は自分の足跡を知らねえが彼奴等は知つてやがる。さうだよ、人間は彼奴等を殺したがるが彼奴等も生きて、森の中を歩きたがる。人間にも考へがあれや彼奴等にもあるさ。彼奴等は牝豚ぢやが、ぢやとて何も人間より悪いわけはねえ筈だ。彼奴等もやはり神様のお創になつたもんだからなあ。あゝ、人間は馬鹿だよ！……と、彼はまたこんなことも言ふ。

——死ねば、この上に草が生へるまでのことよ！

オレエミンは、この山男の息吹で、次第に赤裸な人間の姿にかへることが出来たのであ

る。彼は林の中で黙想する。そして彼は、自分がロシアの貴族でもなく、モスクワの社交界の紳士でもなく、誰某の友人でも親戚でもなく、ただ自分の周圍に居る、鮎や雉子や鹿などと少しも變つたことのない生物の一つであるに過ぎないといふことを明かに悟る。――丁度彼奴等のやうに、イエロオシユカ叔父のやうに、おれの小さな生活をして、そして死んで行くんだ。草が生へるまでのことよ！ イエロオシユカの言つたのは本當だ！ と、オレエニンは悟るのである。かくてオレエニンは、眞實生々と活氣に充ちて、しかも完全に幸福になつたことを感ずる。彼の頭の中に醜態してゐたのは思想ばかりではない。回想ばかりでなく、空想ばかりでもない。彼は或瞬間には自分を、その女房と畑で働いてゐるコサツクだと考へたり、山の中の韃靼人だと思つたり、逃げ去つた野猪だと思つたりさへする。

かくてこゝの原野に慣れてしまつた彼には、もはや過去は縁の無いものに思はれ、いま住んでゐるこの小さな世界を離れては、將來がまつたく存在しないものゝやうにさへ思は

れて来る。モスクワの友人から来る手紙には、彼がすっかり廢れ者にでもなつてしまつたやうに書いて来るが、彼こそ、彼の現在のかうした生活を知らない彼等を廢人のやうに思つたのである。彼は以前の生活の虚偽であつたことを、完全に、明瞭に了解した。——「こゝには、以前想像してゐたやうな駿馬もなければ漠布もない。英雄もゐなければ放浪者もゐない。しかし、人々は自然をそのまま生活してゐる。彼等は死ぬ、生れる、結婚する。又生れる、闘ふ、飲む、食ふ、歡樂をつくす、そしてまた死ぬ。太陽や、草や、動物や、木などの上に自然そのものゝ加へた不變の條件の外には、何等の法則もない。彼等はこれ以外の法則には決して服従しない。美しく、強く、自由である。」と。オレエニンは結論するのである。

オレエニンは、モスクワの友達に宛てゝ手紙を書く。——「……君等は、幸福が何であるか、また、人生とは何であるかを知らない。君等は、一度、全く無技巧の美に於ける生活を經驗しなければならぬ。君等は、僕が毎日目の前に見てゐる事を見且了解しなければ

ばならない。——即ち、山々の永遠にして近づき難い雪、創造者の手からつくられた最初の女が持つてゐたに相違ない原始的な美をさづけられてゐる氣高い女を。そして然る時、君等ははじめて「誰が破滅の底に沈み行きつゝあるか、誰が眞を生き、誰が偽を生きてるか、それは君等であるか、僕等であるか」といふ問題に答へることが出来るだらう。もし君等にして、自己欺瞞の如何に卑しむべきかを知つてゐてくれさへするならば、僕の小屋や森の代りに、君等の客間や、假毛を混へ香油ふりをかけた捲毛をつけた貴婦人や、その不自然に働いてゐる唇や、不自由なもろい手足や、談路のやうに見せかけてはゐるが、その實たわいもない流行の無意義な言葉なごを思ひ出すと、僕はもうやりきれない。

かまはないことよ、お望みならいらしていいわ、あたしは金持の娘だけけど、といったやうな顔をしてゐるあの富豪の娘や、社交界の夫婦者がお互に悪い巧みをしたり戀をしたりする圖々しい顔、果てしもないお喋りや、偽善、それから、なくてはならぬものと誰もが信じてゐる彼の幾代も幾代も傳はつて來た骨の髄にまで徹してゐる倦怠、これらを思ひ出

すと僕は苦しくて堪らない。

「一つの事を受けよ、若しくは一つの事を信ぜよ。君等は眞理とは何であるか、美とは何であるかといふ事を見、かつ了解せねばならない。すれば、君等の言ふことや考へることは塵のなかに没し去るであらう。幸福とは、自然とよもに在るこゝだ。自然を見、自然と語ることだ。……」

これらコサツクの美しくて強くて、自由な生活を眺めても、オレエニンはなほたまらなく自分を恥かしく思ひ、悲しく思ふ。そして、一切を抛棄して、コサツクの軍籍に入り、小舎に家畜とを買ひ、コサツクの女と結婚し、イエロオシユカ叔父と一棲に住んで、彼と一緒に獵に行き漁に行き、そしてコサツク兵の間にまちつて遠征に行かうといふ考へが、しばしば眞面目に彼の頭に浮ぶのである。

しかしながら、或聲が彼に、持て！ と制する。——イエロオシユカヤルカアシユカのやうな生活をそつくり送ることは不可能だ。何故なら、おれは、幸福に關する他の理想を

持つてゐる！と。

トルストイはまだそこで、自分自身の幸福の追求のためにイェロシユカの生活に入つて行くことはしなかつたのである。彼には、さうするまでには、八十年の生涯の闘が必要であつたのだ。八十年の生涯を閲して、そのヤアスナヤ・ポリヤナの村居に到るまでに、彼はつねに一貫した思想のもとに人類の理想に向つて闘つたのであつたが、その出發の鮮かな旗印は、この『コサツク』となつて掲げられてゐるのである。

この物語は、一八五二年ロシアに現はれたものであるが、私たちはこれを見て、異國のものとして看過することが出来ない。現代の日本にそのまゝあてはまる痛烈な批評であることを思はない者はないであらう。あらゆる國、あらゆる時代を通じて、爛熟頹廢した文化をして崩壊せしめようとする時代に、この『自然にかへる』思想こそは、つねに、新らしき運動の指標となるべきものであるといふことは、既に重ねて述べたことがらではある

が、ことの序にこゝに繰返して置きたいと思ふ。

『コサツク』及び其の他のコサツク物語に於て早くも掲げられた若きトルスーイの理想は、即ち、彼が人類生活の理想態であるとして説き示さうとしたものは、彼の生涯を閲するに及んで如何なる形態をとつてあらはれたか、それについてはまた後章に於て述べようと思ふ。

七 獨逸に於ける田園讚美の

思想其他

——この廣い都に、故郷を思ふて胸を痛めてゐる人が一體どれくらゐ住んでゐることか、話しても嘘だと思ふだらう。三人に一人は必ず故郷を戀しがつて暮してゐる。暢氣な田舎に生れた者ばかりがさうではなく、その子供まで親の悲しみを受け繼いでゐる。しかし三代目になると窮屈でも裏長屋に詰め込まれて暮した方が慥巧だといふことを知るようになる。……………

これは、獨逸に於ける郷土藝術の寶玉グスタフ・フレンセンの名作『ヨエルン・ウール』といふ物語のなかの人物の言葉であるが、人類の新たな運命に對する痛烈な批評を孕んでゐる言葉である。

けだし、十九世紀初頭に起つた産業革命ほど急激に、人類の運命に新しい波紋を織り出して見せたものは少ない。産業革命によつて、新しき機械、新しき工場は、幾萬の農人、幾萬の田園労働者をして、その鋤を捨てさせ、その素朴な手押機械を捨てさせて、彼等をしてその下僕たらしむべく呼び集めたのである。そればかりでなく、田園の新しき機械による新農法も、また幾萬の失業農人をつくり出し、彼等は相率ゐて滔々と工場のなかに呼び集められて行かなければならぬ運命にたち到つたのである。そしてこれら田園よりの都市移住者は、急激に都市を膨張させ、こゝに近代都市の建設はなされた。そしてこの鐵と工場との近代都市のなかに住む、これら田園を奪はれた人々、故郷を失つた人々は、こゝに近代の貧民階級即ち所謂第四階級を構成したのであるが、彼等はかくて、機械と噪音と煤煙と鐵との食傷に苦しみ悶えながら、日光を、大地を、その故郷田園を、戀ひ焦れずにはゐられなかつたのである。田園に對する遺る瀧ない郷愁は、これらの人々の深い悲しみを構成した。そして、ひゞり彼等ばかりではない。これら機械と噪音と煤煙との近代都市

が、自然をあとかたもなく壊して完成されるや、はやくも都市人の胸を剝つて波をうちあげて来たものは、また同じくそのむかしの緑と、日光と、大地との幸福を戀ふる田園思慕、田園禮讚の精神でなければならなかつたのである。

かうした時代的現象を離れて考へて見ても、かうした意味の郷愁はさて置き、人類の「郷愁」といふものがある。人類の故郷とは？　それは「自然」である。人類がその故郷に背いて生活（文化）をうち建てる時、この「郷愁」は、つねに「自然にかへれ」ミいふ聲をあげる。このことは、これまでしばしば述べて来たところだ。

さて獨逸に於ける郷土藝術の運動は、右のやうな社會的環境の下に芽を出したものであるが、この郷土藝術の運動に關する一瞥は、なか／＼に捨て難い興味ある一章であらうと思ふ。

産業革命は資本主義を生み、資本主義は徹底的な中央集權主義を招致させたのであるが、十九世紀中葉よりベルリンは完全にその面目を改めた。そしてベルリンは既に獨逸國

の國民の精神的首都の佛をなくし、單なる唯物主義の首都であるに過ぎなくなつたのである。「ベルリンより離れよ」「反ベルリン」等の當時の合言葉は、この郷土藝術といふ名とともに、同様な精神的傾向を言ひ表してゐるものと見なければならぬ。『現時わが國に於ては、自然との關聯觸接が等閑にされてしまつてゐる。これは最も非獨逸的なことであると言はねばならぬ。獨逸の上流社會では、朝太陽がどんな様子でのぼつて來るか、知る人もない。更に甚だしきは、彼等がまつたく、農人や、樵夫や、漁人等のやつてゐるやうな單純、高潔、偉大なる境遇に生活する習慣を忘れてしまつてゐることである。彼等上流人士の境遇は、徹頭徹尾人工的で、狹苦しい部屋や、料理屋や、合奏室や、劇場などが、彼等の最も楽しく暮す場所なのである。』これは、フリードリッヒ・ラインハルトがその著『新理想』に掲げてゐるハウル・ド・ラガルトの言葉である。

ラインハルトはこの獨逸文明を「近代主義を衒ひ、大都市を重んずるの餘り、歴史と國家、過去と國民をを忘れた」ここに發因するを看破して、その郷土藝術の理論をうち建て

たのであるが、その理論は最後に残し、いまはその發生、變遷に一瞥を遣らう。

故郷を追はれた人々、田園を失つた人々の遺る瀨ない郷愁、田園思慕は、自然を、田園を、極度に美しきもの、麗はしきものと観る。田園は宛らこの地上の樂園のやうにも思はる。田園は、極度に美化され、詩化されて映するのである。そして、かく、都市文明人によつて美化せられ詩化せられた田園生活の禮讚は、文藝語ではこれを『牧歌』と名づけられるのである。この牧歌は、いかなる國に於ても、いかなる時代にあつても、凡そ都市と田園との相違懸隔が甚だしくなるとともに現はれてゐるが、——ギリシヤにも、ロオマにも、名高い牧歌詩人が多い。——獨逸の郷土藝術の運動にあつても、これはこの第一の段階として認められなければならないものである。

「牧歌」は都市文明人の「郷愁」より生れた思慕憧憬的な田園生活禮讚であるから、もごより田園の生活の現實を的確に把握してはをらない。そこでは田園生活の暗面、消極面には全然觸れることをしない。その光明面、積極面をさへ、現實的に把握してはをらな

い。一例を言へば、イタリイに現はれた或るものゝ如きは、都會の伊達者が身に牧人の衣を纏ひ、石鹼で洗ひ清めた小羊を蔷薇色のリボンで曳いてそぞろ歩きをしてゐるこいふやうな、おどけたものに、さもすればなつてしまふのである。

さて獨逸の牧歌の一例として、こゝではアイヒェンドルフの作を左に掲げる。

獵人の別れ

おゝ美しい森よ

誰がお前を高くそこに打立てたのか

私の聲の響く限り

お前を立てたその巨匠を譽め讃へよう

さよなら

さよなら おゝ 美しい森よ

深くあたりはさわめき立つて

寂しく鹿の鳴くの聲は聞えない

私たちは歩み進んで笛を吹くも

音は千々に亂れて消ゆる

さよなら

さよなら おゝ 美しい森よ

涼しくなびく緑の旗よ

お前の波のゆらめく下で

忠實にお前はわれ等を育てた

敬虔な多くの傳説の住家よ

さよなら

さよなら おゝ 美しい森よ

森で静かにたゞへたものを

外でも恭々しく保つてゐたい

古い馴染は永く變らぬ

さわめきゆらめくドイツの旗よ

さよなら

神よ守れ おゝ 美しい森よ

ロボキツツの森にて

おゝ廣い谷　おゝ山よ

おゝ美しい縁の森よ

お前は私の喜びや悲みの

慎ましい隠れ家であるのだ！

外では忙しい世間が

いつも欺き合つて騒がしいことだ

汝　緑色の天幕よ

も一度わがあたりに圓天井を張つてくれ！

夜が明けそめると

大地はきら／＼と輝いて

水蒸氣は立昇り

鳥はたのしく囀つて

森の心臓までも鳴響くのだ

その時こそは暗い地上の悩みも

ふり拂はれて消えるであらう

その時こそは古の森も

立派に若く甦るだらう！

この森の中には本當の愛や行ひの

靜かな眞面目な言葉が書かれてゐる

それは人間の寶となるものだ

その平明で眞實な言葉を

私は忠實に読んで見たが

それは私の全存在に

何とも言へない分明なものとなつた。

やがて私はお前を後にして

見知らぬ國に見知らぬ人となつて行く

そして目まぐるしい街上に

人生の見物を眺めに行く

その人生の只中にあつても

お前の力の眞剣さは

寂しい私を高めて呉れる

それで私の心は老ゆる事がないのだ。

(大槻憲二君譯文借用)

この牧歌は、第二の段階に於ては散文に入り、村落小説といふ形式になつて現はれた。そしてつとめて客觀的に、田園生活の實際を寫描したのであるが、この特色としては、比較的寫實は寫實ではあるけれども、主として都市文明人にとつて目新しきもの、珍らしきもの、特異なるものゝみを捉へ來つたに過ぎなかつたり、或は、當時の都市文明生活の欺瞞を諷刺するために田園が取扱はれたり、即ち都市を對照に置き、都市に對比するものとしての田園を扱つたのみであり、田園生活の現實そのものに對する深い、周到な觀察はなされてはをらないのである。例へば、この村落小説の代表作として推さるゝカール・イムメルマンの『オーベルホーフ』の如き、舞臺をウエストフアーレン地方のオーベルホーフといふ村に採り、淳朴な田舎生活を描き出してゐるけれども、その作意は、都市人に對する教化以外には他にないやうに思はれる。

「オーベルホーフ村の村長の如きは、十八世紀詩人の所謂「自然人」では無くて、古來の風俗習慣を固守する頑強なる田舎氣質の老爺である。都會の人間に較ぶれば固より無邪

氣な所も有るけれど、亦田舎人特有の無慈悲、狡猾、迷信、利己など云ふ性質にも乏しく無い。又其決心を貫かむ爲めには犯罪者となることをも辭せぬと云ふ氣象も見えて居る。けれども都會や上流の人士に見るやうな輕薄、虚偽、不自然な所は少しも無い、飽くまでも眞實で有る、飽くまで剛健で有る。この性質こそ實にイムメルマンの謂つてゐる通りに「道德的船暉に惱んで」動搖、浮沈定りなき、時代精神と對照さるべき田舎氣質の特色で、且つ美點である。この對照と云ふことが郷土藝術の世に出づる原因で、イムメルマンの『オーベルホーフ』も文明の弊に苦しんで居る時世の要求と見て差支は無い。〔片山孤村〕この田園生活の寫實的觀察の段階を経て、獨逸の郷土藝術はいよいよその理論と作品とが完成せられるに到つたのである。

郷土の研究、その古來より傳へ遺されてゐる郷土精神の探究、闡明、そこに生活する郷土人を通じてのこの郷土精神の表現、その自然と人間との有機的必然的關係の闡明、人格と環境との闡明、一言にして言へば郷土藝術の精神はこれであるが、こゝでは、前にその

名を掲げたりインハルトの理論に聽かう。

(大概憲二君の譯による)

『人格と民族——これこそは大地と共にゆるぎなき二個の實在である。總ての健全に成育する文明生活の核心である。人格は内部の環であつて、これを中心として更に大なる環がこれをめぐつてゐる。民族がこれである。』

『成熟したる郷土愛、成熟したる種族意識のみこそは、我々が世界的交通の時代に於て要求し得るものであり、また決して消滅すべからざるものである。またドイツ國及び國民に對するかゝる成熟したる愛の上にのみ近世の郷土藝術は樹立され得るのである。』

『詩人に永久不易の根柢を與へ、詩人をして據る處を得しむる陸地は、郷土の外にはない。かの變り易い、そして理窟がましい主義が不朽の作品を生ずるものではない。何故なら流行や主義や黨派などは、例へば彼の四十八年の少獨逸派の如き偉大な革命運動でも、時勢の變遷と共に消滅するからである。しかしながら「種族」即ち民族は、文明を造り、』

藝術を生ずる原動力である。充分なる意識を以てエルサス（リインハルトの郷土）人たり、外輪よりすればドイツ人たるこゝほど、自然にして健全なることがあらうか。而して更に人格たることは其の内輪、中心として之に附隨せねばならぬ。

『國民詩人……即ち歴史と國土とに根柢を有し、この確乎たる立場から社會人生を大觀する詩人にとつては、一時の時代思潮は、其日々に變つて行く形式や傾向たるに過ぎないのである。

『郷土藝術の士は近世的風潮より脱せんとするのではない。「人間」といふ方面に向つて之を補足し、之を擴大し、且つ之を深遠にせんと欲するので有る。彼等は完全なる、遠大なる心情、性格の世界を有し、最も近世的にして、最も常識的なる修養と、國民的にして、而も世界的たる思想とを有する完全なる人間を求むるのである。吾人は都會と田園と四階級の一切と、完全なる有機體とを眞に自由なる、熱情ある、純潔なる、眞摯なる詩文の基礎として希求するのである。この點に於て郷土文藝の擴張であつて反動ではない。

かくて獨逸の郷土藝術は、ゴツドフリード・ケルレル、グスターフ・フレンセン等が、名作を生むに及んで、名實備つた文學史上の意味深き大運動として光輝ある頁を残すに到つたのである。

この精神は、觀方によつては、中央集權的中央唯一主義に對する、田園の、地方の、偉大なる抗議であり、大地より足を離した文明に對する痛烈なる修正であると言つてよいのである。

獨逸に於けるこの運動の精神は、佛蘭西に於ては地方主義レジオナリスムの運動となつて現はれてゐる。

中央集權がその内容を充實させるとともに、「地方」は奈落の底に、顧られることもなくて沈み落ちたのである。かうした社會的環境のなかに、この顧られない「地方」の研究

その傳統と現實とに加へられた研究調査よりして、その地方精神の探究、發揚、闡明を主張したのが地方主義文藝の運動である。

そしてこの運動は、世界大戦の後、この人類の大暴風雨時代の後に、平和と安泰を欲する烈しい要求から、人々が頭を、その國と民族とに、彼等を大地に再び結びつける絆の探究に、と向け出したことによつて、著しい勢力をもつて現に興隆してゐる。

この運動の細叙は、優に大冊を要する題目であるから、こゝではこれだけを紹介して置くにとどめたい。

八 ジョルジュ・サンドの田園讚美

サン・ピエエルの後に、ルウソオの忠實な弟子であり、フランスに於ける最初の田園作家であるジョルジュ・サンドが現はれた。

サンドは田園小説の最初の創造者である。彼女は貴族の令嬢としてその領地ベリーの田野に少女期青春期を過して育つたが、最初の結婚生活の失敗の後には、極度に自由な戀愛生活に入つて行つた。近代の自由戀愛の謂はゞ先驅者といはれる人もまたサンドであつて、彼女の情人であつたり親友であつたりした者には、文學者としてはミュツセ、メリメエ、フロオベエル其他、音樂家としてはシヨバン、リスト其他等がある。しかしながら、その老後、彼女は再びその領地ベリーの田野に歸り、善き祖母として近隣の農人の子供たちのなかに交はり、その筆を田園生活の物語に染めたのである。田園作家としてのサンド

の業績は、この老後歸農の時代からはじまるのである。

その女性らしき慈愛と同情とに溢れた眼で、その愛する地方の田野生活のさまざまな風俗、慣習、人物性格等を綿密に観察し、感受し、その田野生活の麗はしさに對する思慕熱愛と、農人の貧苦に對する憶隱の情を一貫して貫かせて、サンドのかす／＼の田園物語は書かれたのである。そしてその物語に描かれてゐる農人の正直さ、健康さ、素朴さ、貞淑さ、勤儉さ、勤勉さなどの性情は、都會人の機智を厭ひ、サロン（客間）の輕謔を嫌ふサンドの晩年の理想に映じた、聖なる人間生活の本態なのである。彼女のかす／＼の田園物語を貫いてゐる精神は、つねにこれである。

サンドは『村をめぐる散策』のなかで、——田野の人々は、都市の人々に比して、善良であるか、奸惡であるか？——といふ質問を自ら提起し、それに對して自ら答へてゐる。——私は決して、彼等（農人）がテオクリットの牧人であり、黄金時代の後繼者であると言ひ張らうとするものではない、しかしながら眞の田舎には、田野の眞正な生活のなかには、

他の何處よりも、頽廢の種子が少いといふことを、私は知つてゐると信ずるのである。

『フランソア・ル・シヤムビ』の棄兒は、生み落されたまゝの野生の兒であるが、あらゆる善なる本能をもつてゐる。幼くして大人のやうに勇氣をもつてゐる。マドレエヌ・ブランシエは彼を愛するようになる。彼女は彼が善良であることを見たからである。彼は、エミイルのやうに、まつたく惡さを知ることなく、穢い言葉を發することを知らず、また耳にしてもそれを解せず、十五才になる。かうした環境のなかで、彼は成長する。そして彼のマドレエヌ・ブランシエに對する愛情は、自らは知らず戀になる。愛と自然、これはフランソアにとつての二人の師である。かくて彼は大人になつた。後に彼がマドレエヌ・ブランシエの重大な問題に處して、決斷と聰明さとをもつてそれを引受けるのを見て、讀者は彼のこの變化に、むしろサンドの理論を明白に確證してゐるこの成長に、驚くようなことはないのである。

フランソアに比すべき、單純な、自然のままの野生兒『吹奏手』のなかのジョセエは、内氣な、憂鬱な子である。母親は彼のことを、精神のない子供だと言つてゐる。しかし、ジョセエは靈感をもつた子供である。幼くして彼は、プリユレットの唄ふ歌にかずく／＼の夢を夢みる。長ずると彼は風笛を吹きに羊齒の茂みのなかに隠れて行く。そしてその歸りには、彼は見違へる程元氣になつてゐる。彼は初めて得た給料を悉く投じて驟馬曳きから小さな風笛を買ふ。彼はそれに熱中し、そのためやがて病みついたやうな憂鬱症に罹る。音曲が彼に魅入つてしまつたのである。感激的なメロディに夢の様に憧れる。無口なジョセエ、彼は運命から免れることの出来ない藝術家である。人々は彼の死骸を溝のなかに見出す。ペリーの善男善女の考へでは、人はその魂を惡魔に賣渡さずには音曲家に離れないのであつた。……この作のなかで、森林の老人、吹奏の老名手、ジョセエの笛の師グラシ・ピユシユウは、藝術家の魂をもつた野人である。彼は言ふ。——音曲には二つの型がある。學者先生はそれを長階音と短階音と言ふが、わしはわしで、朗らかなのと曇つたと

の二つに分ける。平野の人は長階音で歌ふし、山の人は短階音で歌ふ。もしお前が短階音でやつてみたければ、もの悲しい場所か荒れ果てたところへ行つてやるがよい。それも、まづ自分で涙を流さなければならぬ。

『魔の沼』のジェルマンも、原始的な農人である。田野の健康な空氣のなかに、『永遠に若く、美しく、豊饒な、そしてすべその存在物に對して美と詩とを注ぎ込む自然』の胸のなかに、たくましい美德を汲み取つた立派な働き者、それがジェルマンである。ジョセエに風笛を與へた驟馬曳きのユリエルは、精悍な、惻巧な、鬪に強い、それでゐて心の優美な山人の典型であるが、彼は實際の驟馬曳きの仲間には見られない、大地に働く農人の姿を變へたものに外ならない。

サンドの理想主義は、その女性の主人公に更に明にすることが出来る。『愛らしきファデット』のファデットは、シャムビのやうに、同じく自然と愛とに慣らされた女性である。穢い魔法使の小娘ファデットは、後に綺麗に梳られた黒い髪に具合よく頭布をかむつ

た、見る目も気持のよい百性娘になる。昨日魔法使だつた彼女は、いまや教會堂で熱誠な祈禱をさしげる。『魔の沼』のマリイは、十六才の少女である。遊んだり踊つたりするこゝとしか考へなげ年頃で、彼女はすでに母親の心をもつてゐる。彼女は疲れることなき、勇氣にみちみちた働き者であり、閑があれば家具を擦つて鎖のやうに磨きたてる。彼女はただ葡萄酒を二度しか飲んだことがない。彼女は茶屋で飲まされた葡萄酒の残りをポケットに入れて出るほどつゝましい。シヤムビに對するマドレヌ・ブランシエは、母親の位置から友達、それからやがてつゝましい妻の位置に變つて行く。そして彼女は、降りかゝつて来るさまざまの試練にも、つねに泰然と堪へ、生涯を通じて誤つことのない聰明さをもつて事を處して行く。

さて、私たちは名作『魔の沼』の女主人公マリイについて、いま少しく詳しく見てみたいと思ふ。その方法として、こゝに名作の更概を述べることが、最も要領を得たものと思

ふ。

農夫ジェルマンは、三人の子を残して妻が死んでから二年にもなるが、そしてまだ廿八の若さに、後妻を貰ふといふ考へもなく、たゞ子供を可愛がり、野に出て稼ぐことの外には眼もくれない。養父は氣が氣でない。聾はまだ若い、孫たちにも深切な母親を與へなければならぬ。死んだ娘にしても、一家が一日として佛にお祈りを缺かしたことはないことも知つてゐる筈、子供のために善い後妻を貰ふこともあの世で望んでゐる筈だと考へる。

養父には養父の考へがある。若い女はいけない。若い女は輕薄である。あまり貧しくて困る。肝心なことは、慥巧で、きちんとして、やさしい、しかもジェルマン位な年になつてゐないといけない………。養父はそこで一人の寡婦をジェルマンにすゝめる。ジェルマンは別に氣がすゝまなかつたが、養父のすゝめるまゝに、一日野を越えてその寡婦に會ひに行く。……

その時、隣りに住むギエツトといふ女が、その話を聞いて、一人娘のマリイと一緒に連れて行つて欲しいと頼む。マリイは十六歳の少女であるが、家の貧困を助けるため、遠くの農場に牧童として雇はれて行くのである。

——わたし共は二人で泣きました。けれど、やがて勇気が湧いてまゐりました。ここで二人で居りましても働く土地がございません。マリイももう自分の食べるものを稼ぎ、貧しい母親を助ける年頃です。

養父母もジェルマンもそれには悲しい顔をして見せた。しかも、ギエツトは言ふのである。

——いゝえ、わたしどもはもう悲しくはありません。あれは、なか／＼勇気のある娘でございませう。片時でも手をつかねてゐることが嫌ひな娘です。仕事がない時などは、家具を磨いたり擦つたりして、鏡のやうに光らかに置きます。まつたくあの娘は、黄金の塊りのやうに値打のある娘でございませう。

相談はまとまつて、ジェルマンはマリイを連れて、野を越えて旅立つことになった。十六才の少女を二十八才の男にまかして旅にやるといふことは、都會の母親たちは考へないであらう。しかし、かうした清らかな風習は、大都市の頹廢した流行からは、遠く田野を貫いて流れてゐる聖なる傳統なのである。

牝馬は若くて元氣がよかつた。ジェルマンとマリイを乗せて勇ましく野を越えて進んだ。突然、路傍の茨のなかからジェルマンの子供のプチ・ビエエルが走り出た。子供は父親を待伏してゐたのである。馬に取縋つてビエエルは離れない。貶めても賺しても聽入れない。それにマリイも一人歸すに忍びないと言つて、たうとうビエエルも馬に乗せて行く。

遠く野を越えて行くうちに馬は渴して來た。ジェルマンも腹がすいた。ビエエルも渴を訴へた。それゆえ野中の茶屋を見つけると、ジェルマンはそこで一休みすることにした。

——いゝえ、わたし何も欲しくはないの。わたしは外で待つてゐますわ。

マリイはかう言つて入らない。しかし、そんな筈はないのだ。マリイは發育盛りの少女だ。その上今朝は涙ぐんで飯も碌に食べなかつたのだ。そして農場はまだぐ速い。そこでジエルマンは、無理矢理にマリイを促して茶屋に入つた。

農夫はゆつくりゆつくり食事をとる。ピエエルは小一時間も皿から顔を離さない。再び馬を急がせたが、太陽はやがて山の彼方に沈んでしまつた。やがて月が出る筈であつた。ところが夜とゞもに何處からともなく一面に濃い霧が涌いて来る。月もそのために暗み、彼等はその霧のなかで路を失つてしまふ。

彼等は林の中の大きな樫の木の下で、霧の霽れるのを待つことにする。樫の木の近くには沼があつた。

マリイは、ピエエルを抱いて木の根方に坐る。ジエルマンは枯木を拾つて火を燃やす。——あなたはいつも元氣な顔をしてゐるね。

ジエルマンは、マリイの動かない顔を見て自分も勇氣を出す。

——わたしたちはいつも悲みは絶えません。勇氣をなくしちゃいけませんわ。

マリイは健氣にもかう言つて、いつしんに子供を暖める。夜が更けるとジエルマンは空腹を感じ出した。しかし食べる物はない。その時マリイは懐から葡萄酒の瓶を取り出した。

——あなたはあの茶屋で葡萄酒を二瓶お誂へになつたでせう。わたしは坊やと二三滴ほど飲んだの。わたしは葡萄酒を飲んだのは生れて二度目ですわ。それであなたは二瓶のお代を拂つたでせう。

——それで？

——それでわたし、あとの一瓶をそつミ懐に入れて持つて來ましたの。また喉が渴くといけないと思つて。

ジエルマンはそれですつかり感心してしまふ。すると、マリイはさらに、パンの代りにと言つて栗の實を出す。彼女は途々、馬上から手を伸ばしては、栗の實を撈つて來たので

ある。

二人は夜更けるまで語り合つたが、マリイはそのうち眠つてしまつた。ジェルマンは眠るこゝが出来なかつた。頭のなかでは惱ましい思ひが渦を捲き出した。彼は焚火のまはり
を二十度も廻つた。遠ざかつてたり近寄つたりした。……この土地で、マリイより愛す
べき女が一人でもゐるだらうか？ マリイには華やかな色合はない。しかし彼女は野原の
花のやうに清楚だ。川原鶉のやうに輕快で、鶉のやうに達者だ。白馬を見てゐるやうに氣
持がよい。快活で、賢くて、働き好きで……ジェルマンには戀心が湧いて來たのであ
る。

夜が明けると彼等は出發した。路々彼はマリイにその心を語つた。しかしマリイは自分
の貧しさを語つて斥けた。路はやがて彼等が別れなければならぬところに來た。その時、
彼は單身寡婦を見に行き、ピエエルはマリイが農場に連れて行き、歸途彼がそこに寄ると
いふ相談がまとまる。

さて、ジェルマンは寡婦に會つたが、もとより氣に入りはしなかつたので、直ちに歸途につき。マリイの農場に寄る。ところが、農場にはマリイもピエエルも見えない。牧童に訊ねても、主人に訊ねても知らないといふ。彼は狂氣のやうに心が騒ぎ、馬に鞭あてゝ來た路にとつて返へす。

彼は昨夜一夜を明かした櫛の木のところに来た。そこに一人の老婆がゐた。彼は老婆に訊ねてみたが、彼女は聾であつた。

——はい／＼「魔の沼」といふのはこゝでございます。誰でも夜になつてこゝに着きますと、夜が明けるまでこゝから離れることが出来ないのです。たとひ出發して行きましても、必ずまたこゝに歸つて來てしまふのです。

ジェルマンは聲を限りに彼等の名を呼んだ。ミ、マリイとピエエルは、林の繁みから連れだつて出て來た。彼等は農場を脱出して來た理由をジェルマンに語つた。農場主はマリイの姿を見るなり、よからぬ振舞を見せたのである。

彼等はいまや、旅だつて來たと同じ姿で、しかもあまりにも前とは異つた心で、再び野を越えて村に歸つて行く。そしてジェルマンとマリイとは結婚をするのである。

サンドはこゝで、マリイのうちに農人の娘のあらゆる美を描き出して見せてゐる。疲ることなき働きの者、働くことを愛する者、そして慎ましき勤儉、家政を愛する心、慎やかな勇氣、貞淑さ。そしてサンドはこれらの姿を、都會の頹廢に對して高く誇らかに掲げようとした。それをサンドは目醒ましくなし遂げたのである。

そして聖なる人間生活の理想を生きてゐるこれら農人の貧困を痛んで、サンドは晩年には、一種の社會主義を奉ずるまでになつたのである。

九 農人の姿態

昔、或る國に一人の金持の百姓があつた。彼には、軍人のセミヨン、肥滿のタラス、馬鹿のイワンといふ三人の息子と、啞の娘とがあつた。軍人のセミヨンは國王に仕へて戦争に行き、肥滿のタラスは商賣をしに町へ行き、馬鹿のイワンは妹とともに家に残つて土地を耕した。

軍人のセミヨンは高い位を得て貴族の娘と結婚したが、夫人が金使ひが荒いのでいつも貧乏した。それで實家へ來て財産を貰ひにかゝつた。父親はイワンに相談した。「欲しいだけあげなさい」とイワンは答へた。

肥滿のタラスも大儲けをして金持になり、豪商の娘と結婚したが、それでも財産が欲しくて父親の家に貰ひに來た。父親はイワンに相談した。「欲しいだけあげなさい」とイワ

ンは答へた。

老惡魔は、この三人の兄弟が喧嘩もせず、事に済したのに腹を立て、三人の小惡魔に命じて三人に取憑き、大喧嘩をさせるように命じた。

セミヨン係りの小惡魔は忽ちセミヨンに取憑いて、彼を向ふ見ずな大將にしてしまひ、王に向つて全世界征服を言上させた。そして大軍を率ゐて戦争に行かせ、さん／＼に負けさせ、命から／＼逃げ歸らせた。

イワン係の小惡魔は、まづイワンに腹痛を起させ、それから彼の畑に行つて、鋤返しの出来ない程石のやうに地面を固くした。しかしイワンは鋤を把ると、腹の痛みに呻りながらも、畑の全部を鋤返してしまつた。小惡魔は地の中から鋤を捕へては引張つたが、イワンは身體を火のやうにして働いた。

そこで小惡魔は仲間の力を借りて、再びイワンの鋤を地中から引留めた。鋤は木の根に

でも引掛つたやうに動かなかつた。イワンは片手を鋤の中へ突込んだ。そして、眞黒い、のたうちまはる異形なものを引出した。

小悪魔は悲鳴をあげて助けを乞ふた。そして、三本の木の根を與へてこれを飲めば何でも癒ると教へて逃がして貰つた。イワンはその一本を飲んだ。腹痛は忽ち癒つた。残りの二本を仕舞つて、イワンはまた畑を鋤いた。鋤き終つて家に歸ると、家にはセミヨンが命から／＼逃げ歸つてゐた。『暫く俺達を養つてくれ』と、セミヨンが言ふに、イワンは『いいとも』と引受けた。しかしセミヨンの妻は、『私は穢い百姓と一緒に食事は出来ませんよ』と言ふ。『よし／＼、どうせわしは馬の世話をせにやならん』イワンはかう言つて外へ出た。

もさて小悪魔どもは、どうかして、イワンを苦しめようと、牧場へ行つて牧場に水を漲らし、泥土で草をすつかり被せてしまつた。イワンは鎌をもつて草刈りに出たが、鎌の刃は忽ち曲つてしまつた。すると彼は家に歸つて、新しい鎌をもつて来てどし／＼草を刈

つた。小悪魔は必死に抵抗してみたが、却つて尻尾を切られてしまった。すると小悪魔は麥畑を荒した。しかしイワンは家へ歸つて長刃の鎌を持つて來て、どしどし麥を刈つてしまつた。小悪魔は齒がみをして翌日は燕麥畑へ出掛けた。しかしイワンは夜の間に燕麥を刈つてしまつてゐた。

夜が明けるとイワンは妹ミ一緒に燕麥を荷車に積んだが、その時小悪魔はたうとう捕まつてしまつた。すると小悪魔はイワンに、麥藁から兵隊を拵へる法を教へて逃がして貰つた。イワンは荷車を曳いて家に歸つた。家には肥滿のタラス夫婦がゐた。タラスも小悪魔に取憑かれて、大損をして生命からく逃げ歸つて來たのである。『暫く俺達を養つてくれ』とタラスが言ふと、イワンは『い、とも』ミ引受けた。しかしタラスの妻は、『私、こんな百姓と一處には飯は戴けないわ』と言ふ。『よし、どうせわしは馬の世話をせにやならん』イワンはかう言つて外へ出た。

タラス係りの小悪魔は手がすいたので、イワンの方に廻つた。イワンは森に木を伐りに

出た。悪魔は木の梢に陣どつて、イワンの伐つた木を倒すまいとかゝつた。しかしイワンは懸命に木を倒した。イワンはへとくと疲れてしまつたが、それでもぐんぐんと仕事を進めて行つた。そしてたうとうこの悪魔も木から落ちて捕まつたしまつた。悪魔は木の葉から金貨を拵へる法をイワンに教へて逃がして貰つた。

さて二人の兄等は別々にイワンに家を作つて貰つて住むようになつた。イワンはお祝ひをすつると言つて兄等を招待した。しかし『百姓の御馳走は御免だ。』と言つて拒つた。そこでイワンは村の人々を集めて御馳走をした。その時イワンは麥藁で兵隊をつくり出した。木の葉から金貨を拵へたりして見せて村人を喜ばした。

その話を聞いてセミヨンはイワンに頼んで兵隊をこしらへて貰つた。すると、その兵隊を編制してセミヨンは戦争に出て行つた。タラスもその話を聞いて、イワンに頼んで金貨をこしらへて貰つた。そしてその金でタラスは商賣をするために町へ出て行つた。

セミヨンは勝つて國王になり、タラスは儲けて金持になり、やがてこれも王様になつ

た。しかし彼等はなほ不足を感じてイワンに頼みに來た。

——わしはもう兵隊はこしらへない。

イワンは珍しくそれを斥けた。イワンは言つた。『お前の兵隊は人殺しをしたからだ。

わしは兵隊はたゞ樂隊をやるものとばかり考へてゐたのに、人を殺したのぢや。もう一人もこしらへない』イワンはどうしても兵隊を拵らへてやらなかつた。

——わしはもう金貨はこしらへない。

イワンはタラスに向つてかう言つた。『お前の金貨が人の家の娘から牝牛を引奪くツて行つたからだ。わしは金貨は玩具にするものとばかり考へてゐたのに、牝牛を引奪くツたのぢや。もう一つもこしらへない！』イワンはどうしても金貨を拵へてやらなかつた。

イワンは家にゐて父母を養ひ、啞の妹とゞもに野良仕事をしながら暮してゐた。一日、家の飼犬が病氣にかゝつて死にさうになつたので、イワンは惡魔から貰つた木の根を吞ました。すると、病氣は忽ち癒つた。丁度その時、國王の姫様が病氣に罹られた。國王は誰

でも妃を癒した者に姫を與へて王位を譲るといふ布告を出された。イワンは父母にすゝめられて、残つた一つの木の根をもつて宮殿に急がうと家を出た。家の闕居を跨ぐや否や片手の萎へた女乞食がやつて來た。すると彼は木の根を女乞食に吞ましてやつてしまつた。乞食は忽ち癒つた。しかし、イワンは宮殿に急いだ。そして彼で宮殿の闕を跨ぐや否や姫様は全快した。かくて二人の兄弟のやうに、イワンは王様になつたのである。

王様のセミヨンは軍隊をなほ増し、欲しいものでもあると直ちに軍隊を遣はして徴集して來た。金持の王様タラスは、法律を敷き、人民からは税金を納めさせた。人頭税、通行税、靴税、衣服税といふやうに税金を取立てゝは富み榮えた。

イワンは、しかし、間もなく王様の長衣を脱いでそれは仕舞ひ込んで、再びもとの粗末な麻のシャツやズボンや百姓靴に歸り、父母や啞の妹を呼びよせて、再び百姓仕事を始めた。すると、人民は彼に諫めた。

——けれど、陛下は國王様でゐられます。

イワンは答へて言つた。

——左様、けれど國王もやつぱり食はねばならん。

大臣が彼のところにやつて來て言ふ。『官吏の俸給を拂ふ金がございません。』イワンは答へる。『よし、拂はんでよい。』『それでは誰も勤務をいたしませんでせう。』よしよし、勤務をさせんでいゝ。さうすりや働く人間が澤山になるわけだ。役人ごもに肥料を運ばせるがよい。』

人民はやがて、イワンが馬鹿であることを知るようになった。『人民どもは貴方を馬鹿だと申してをります。』妃がかう言はれると、イワンは答へた。『よし、！』

しかし妃もやがてその衣を仕舞ひ込んで、イワンや啞娘と一處に仕事をはじめた。なつた。

賢い人々は残らずイワンの國から立去り、馬鹿ばかりが残つた。誰も金をもたなかつた。彼等は達者で働いた。彼等は自らを養ひ、他の人々を養つた。

さてこゝに老悪魔は、三人の弟子が失敗したのを見て大に怒り、自ら仕事を始めることになつた。彼はまづセミヨン王の許に行き、その軍隊をもつて印度を征服させた。セミヨンはさんぐに負け、生命からぐ逃げ歸つた。老悪魔はこんどはタラスの許に行き、さんぐにその財政を亂した。セミヨンが生命からぐ逃げて來て救ひを求めた時には、タラスももう身動きも出来ない状態にゐた。

老悪魔は最後にイワンの國に行つた。そして將軍に化けて、イワンに勸めて軍隊をつくるように説いた。しかしそれは見事失敗に終つた。すると老悪魔は、近國の王に取り入り、俄に軍隊を動かしてイワンの國に攻め入らした。人民はイワン王にかくと傳へた。イワンはしづかに答へた。

——よしぐ！ 打棄つて置け。

敵軍は進んで來た。しかしイワンの國には一人の軍隊もゐなかつた。人々は日常通り、野に出て働いてゐるのであつた。侵入軍は忽ち退屈になつて旗を捲いて歸つてしまつた。

老悪魔は今度は紳士に化けて來た。彼は金貨を澤山に持つて來て、人民の品物と金貨とを交換した。勿論この國には金貨はなく、品物と品物とを交換し、勞働は勞働で拂ふのであつた。人々は紳士の金貨を見て驚いた。そして品物を持つて來てその金貨に換へて貰つた。

しかしながら、人々はその金貨を、首飾にしたり、垂髪の飾りにしたり、或はそれをもつて街路で遊んだ。そしてやがては、人々はそんなものに倦きてしまつて、誰も欲しがる者はなかつた。

——いゝや、わたしたちには金貨はいらない。こゝには拂ひも、税金もないのだ、金貨があつても使ひみちがない。

紳士はイワンに取入つて、一日、イワンの御馳走になることになり、食卓についた。その時啞娘は紳士の手が少しも硬くなく、綺麗で、つる／＼してゐるのを見ると、彼女は紳士を食卓から引ずり下してしまつた。イワンの妃はかう言つて説明をした。『私の義妹は

ごつ／＼した手をもたない人には食卓につくことを許しません。』

紳士はイワンに向つて、手で働かなくとも頭で働く仕事がある。それも非常に骨の折れる仕事だ、ミ抗議をする。『もし私が頭を痛めて仕事をしなかつたなら、あなたは方全部はいつまでも馬鹿のまゝでゐなければなりません。私は頭で働いたので、いまではあなた方を教へることが出来ます。』

そこで、紳士は高い塔にのぼり、人々を集めて演説をした。しかし人々は間もなく立ち去つてしまつて、めい／＼の仕事についた。紳士は二日も三日も喋べりつゞけた。紳士は疲れてのめり、柱に頭をぶちつけてしまつた。人民の人はこれを見て、『なるほど、あの紳士は頭で働きはじめた』と言つた。

紳士は疲れてひよろ／＼になり、幾度も／＼頭を柱にぶちつけた。そしてつひには、高い塔から落ちて頭を割つた。

イワンはいまなほ生きてゐる。その國には人民が蝶集してゐる。彼の二人の兄弟も、い

までは彼のところで養はれてゐる。『食物を下さい』と言つて来る人には誰にもイワンは、『よし／＼、こゝに留まるがよい。こゝには何でも澤山あるのだから』と言ふ。

この國には唯一つ特殊な習慣がある。つまり、ごつ／＼した手を持つた人は食卓につくのであるが、そんな手をもたない人は、他の人々の食ひ残したものを食はなければならぬ。

これは『イワンの馬鹿』といふトルストイの物語である。この物語の解説は、次章に入つてなされるであらう。

10 『アイワンの馬鹿』とトルストイの 重農的思想其他

『アイワンの馬鹿』一篇に於て、トルストイは殘るところなくその道德觀、國家觀、社會觀を語つてゐるのであるが、言ふまでもなくトルストイの胸に宿つた人類生活の理想は、馬鹿のアイワンのうちにあるのでなければならぬ。

地を耕して食ふ生活は、トルストイの信ずるところでは、人類生活の理想態である。地に働く労働は、あらゆる労働のなかで、人類に固有な、最も愉快な、最も健康的な、そして最も道德的な労働であり、この労働によつてのみ、人間ははじめて一個の人間であり得る。とトルストイは固く信ずるのである。トルストイの無政府重農主義の道德的根據は、實にこゝに存する。

マルクスによれば、労働者が現代悲惨な奴隷状態に置かれたのは、社會經濟の不變の法則によつて、生産機關が資本階級の占有するところとなつたからであると解釋する。トルストイはそれに全く反對した。トルストイの解釋するところにしたがへば、その根本の原因は、資本階級の生産機關の占有にあるのでなく、労働者が自然との接觸ある生活様式を奪はれ、自由を奪はれ、強制的に機械の奴隷たる労働を強ひられて、不健全な、不健全な商工都市の生活をしてゐることに因るのである。しからば何物がかうした状態を將來させたか？ マルクスによれば、この原因も同じく資本階級の生産機關の占有であるとする。が、トルストイはこれにも全く反對した。そしてトルストイによれば、この原因、即ち、労働者が田園を追放されて都市に流れ込んだ眞因として次の三ヶ條をあげる。

一、土地の掠奪（土地的奴隷制度）

二、租 税（課税的奴隷制度）

三、都市生活の魅力

『イワンの馬鹿』に於て、トルストイは軍人のセミヨンに侵略主義、即ち軍國主義國家を代表させ、商人のタラスに資本主義的國家を代表させてゐるのであるが、戦争——商業戦争も同じである——による土地の掠奪、課税による税金携取が、明確な意圖をもつてこの物語に描かれてゐるのを見逃してはならない。

土地の掠奪は、昔は封建主義により、近代及び現代に於ては地主といふ形式により、ともに田園人を若しめてゐるところのものである。そして田園人はその生れた土地の一部分を自由に使用する自然の權利を奪はれてゐるのである。そこでトルストイによれば、土地の平等的使用權を奪ふ國家的強權がなくなれば、土地は社會的共有となる。人々にそこで巢のなかの蜜蜂のやうに平和に共同生活をする事が出来る。この點でトルストイと無政府主義は一致してゐる。

トルストイの國家觀は、マルクスの國家觀とは正反對である。マルクスによれば、近代國家の本態は帝國主義である。そして帝國主義は、資本主義の最後の段階であつて、同時

に、社會主義國家の最初端でなければならぬ。トルストイは『イワンの馬鹿』のなかにも明確に示してゐるやうに、帝國主義を徹底的に否定してゐるのであるが、しかしトルストイの帝國主義は、資本主義とは別個にもなほ存在してゐる。それは、國家的強權を意味する。國家的強權は組織である。國家の本態は組織的強權である。強權が存在する以上、そこに必然に他人の勞働の利用、他人の生産物の擄取が行はれざるを得ない。それは、マルクスの社會主義國家に於ても同様でなければならぬ。

他人の勞働の利用は、トルストイにしたがへば、許すべからざる道德的罪惡である。トルストイは、かくていかなる形態の國家をも全然否定してしまつたのである。

かくてトルストイの無抵抗主義が生れる。國家を廢止する方法として、トルストイは無抵抗主義をとる。——大軍を編んで敵國人は侵入して來た。しかしイワンの人民は、それには眼もくれず鋤をかついで野良で働いてゐる。そして侵入軍をかへり見て言ふ。『可哀さうな人達ぢやな。お前さんたちの國で生活が困難なら、何故こゝに引越して來て住ま

のちや。』侵入軍は忽ち退屈になり、すぐと故國へ引揚げて行く。イワンの土地には、政治家もゐなければ兵隊もゐない、官吏といふ穀つぶしもゐなければ、租税などといふものもない。否、金貨さへないのである。無抵抗主義は、政治家になつたり、兵隊になつたり、官吏になつたり、租税を拂つたりして、國家の組織的強權の活動に關與することを全然拒否することである。

トルストイは、人間生活の最後の目標を、無政府重農主義に見出してゐるのであつて、その無政府重農主義社會の輪廓を、この『イワンの馬鹿』のなかに素描してゐるのである。現代の都市の勞働者は、セミヨンやタラスのやうに、一方、政治的中央集權の根絶ことも、そしてそれに従ふ經濟的中央集權の根絶とともに、他方、田園に對する本來的な思慕より、再び一度は追放された田園の勞働に歸つて行くべきであるとトルストイは信じてゐるのである。

イワンの馬鹿！ 何といふ底知れない皮肉であらう。イワンの善良さ、底知れない善

良さである。間抜けさ、底知れない間抜けさである。心の根強さ、底知れない根強さである。勤勉さ、底知れない勤勉さである。

これは、大地そのもの、やうに根強い性格である。これは、大地そのものである。ロシア人は、このイワンを目して、ロシア農人の典型であると言説するのであるが、私たちは、私たちの國に、現在もなほ、幾人もこのイワンの馬鹿を見出さないであらうか。

この『馬鹿』のうちには、無限の賢さの小函が藏せられてゐる。

大地に即して生活することが人間生活の理想態であるといふ思想は、容姿こそちがへ、社會的動機こそちがへ、(それがちがつてゐるからこそ)さまざまな形態をとつて人類の思想史を貫いてゐるものであつて、ルウソオの哲學、サンドの田園小説、獨逸に於ける十九世紀の郷土藝術の運動、佛蘭西に於けるフウリエ、ブルウドンの思想、トルストイズム、クロポトキンの無政府主義の思想、佛蘭西に於ける十九世紀より二十世紀にかけての地方

主義の運動、エリゼ・ルクリュの思想、わが國の現代に於ける農民文藝の運動、すべてこれらはその文化理論の基礎をこゝに發してゐるのである。

こゝで私たちの農民文藝の運動について一言添へて置きたいと思ふが、農民文藝はマルクス流の言ひ方をすれば、現段階に於いては、その階級理論の上に立つた無産階級文藝である。農民の解放運動である。けれども、その根底をなす文化理論として、大地に即して生活することが人間生活の理想態であるといふ思想をもつものであると、私自身は考へてゐる。

反資本主義といふ點で、マルクス派共產主義文藝と農民文藝とは或る一致をする。しかし前者が、資本主義を否定し、都市主義を肯定してゐるのに後者は與しない。後者は資本主義を否定し、近代都市主義の一切に對して、否定的である。私たちは斷言することが出来る。太陽と大氣との下、綠爽やかな大地の上を背いて、幸福なる棲家、幸福なる仕事場は何處にもないのであると。かつて人類は、躍ぐ太陽の下に、清らかな空氣の中に、綠爽

やかな大地の上に、幸福な棲家を、幸福な仕事場を求めて居た。そして現代、二十世紀に於て人類はその正道から滑り落ちて、煉獄の業火に苛まれてゐる。資本主義文明は人類を驅つて煉獄のなかに突落としたのである。煉獄とは？　そは近代都市である。近代都市は實に二十世紀の人類にとつての煉獄である。

しかしながら、天國、それは、耀く太陽の下、清らかな空氣の中、綠爽やかな大地の上に、人類が「自然」を奪還した時にはじめてその扉は開かれるのである。

これを、全地が一樣に都市的になると言つても悪くはない。何故なら、全地に、新しいその本来の意味に於ける文化は行きつまるであらうし、田園の面目は今日とは一變するであらうからである。これを、全地が田園になると言つてもよい。何故なら、宛らこの地表の腫物の如き近代都市はまつたく影を没し、いづこにも太陽は耀き、綠は燃えるからである。

近代の偉大なる地理學者であり、無政府主義者としてクロボトキンの先輩でもある佛蘭西近代の巨人エリゼ・ルクリュは、その名著『地人論』のなかで言ふ。

——自然は、多數人に對して大なる慰藉者である。けれども住民多き都會と同様に、田舎も僻陬の地も、惡趣味の爲に、特に所有戰の惡虐暴戾の爲め醜變惡化するものである。蓋し自然に其魂を興るものは人である。人は自己固有の理想に應じて土地を美化し聖化するが、然し又、之を俗惡にし、粗惡にし、厭惡すべく、墮墜すべきものにする。美を理解する程にまで向上するであらう明日の人間は、其自然に對する尊重により、自然に對する愛によつて、決して自然の線や色やニュアンス等を無謀に斷切つたり破壊したりする様な仕方では斷じて其住家を設けぬであらう。彼は自然の美を増すことに快感し、之を滅殺することに恥ぢるに相違ない。

光り輝く近代都市が夜空を焦がしてゐる間は、田園に光明はささないものである。近代都市が、社會主義都市——依然として中央集權都市である限り——とかはつても、それは同

じであると私たちは考へる。

地表には、何處にも腫物があつてはならない。平かに、深く、耕されねばならぬ。

一一 蘆花と田園主義

徳富蘆花は、その『自然と人生』によつて、はやくから自然美鑑賞の歩みを起した人であり、日本の近代文學に於てこの功績は忘れられてはならない。

蘆花は、第一期のかゞやかしい散文時代を経て、長篇小説の作者として進んだが、トルストイは早くより彼の敬慕するところであつた。そしてその順禮紀行の旅に出で西歐に渡つた時、彼は晩年のトルストイをそのヤスナヤ・ポリャーナの邸に訪ねた。トルストイはその時、さきにも述べたやうに、こゝの草舎にあつて農人のなかに地を耕して暮してゐたのである。

蘆花は、その長篇小説時代の次ぎには、東京府下千歳村に茅屋を營んで、百姓の生活に入つた。そして村人の仲間となつてその生涯を終へた。『みづづのたはごと』一卷は、そ

の田園生活の記録である。

蘆花は、元來が詩人であり文學者であるゆゑに、その田園主義といふべきものも、説かれてはあまりに情緒的であり過ぎ、文藝的であり過ぎる。勿論、蘆花としてはそれでよろしいのである。彼は文藝家であつて、思想家ではないからである。

蘆花の重農の思想を紹介するためには、『みづづのたはごと』のなかの『農』といふ一文によるのが最も適當であると思ふから、左にその全文を引用してみようと思ふ。

一

土の上に生まれ、土の生むものを食ふて生き、而して死んで土になる。我儕は畢竟土の化物である。土の化物に一番適當した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活の方法中、尤もよきものを選び得た者は農である。

二

農は神の直參である。自然の懷に、自然の支配の下に、自然を賢けて働く彼等は、人間化した自然である。神を地主とすれば、彼等は神の小作人である。主宰を神とすれば、彼等は神の直轄の下に住む天領の民である。綱島梁川君の所謂「神と共に働き、神と共に樂む」事を文義通り實行する職務があるならば、其れは農であらねばならぬ。

三

農は人間生活のアルファにしてオメガである。

ナイル・ユウフラテの畔に、木片で土を掘つて、野生の穀を蒔いてゐた原始的農の代か

ら、精巧な器機を用ゐて大仕掛にやる米國式大農の今日まで、世界は眼まぐるしい變遷を
 閱した。然しながら土は依然しとて土である。歴史は青人草の上を唯風の如く吹き過ぎた
 に過ぎない。農の命は土の命である。諸君は土を亡ぼすことは出来ない。幾多のナポレオ
 ン、牛ルヘルム、シシルローズをして、勝手に其帝國を經營せしめよ。幾多のロスチャイ
 ルドモルガンをして、勝手に其弗法を掻き集めしめよ。幾多のツエツペリン、ホルランド
 をして勝手に鳥の眞似、魚の眞似をなさしめよ。幾多のベルグソン、メチニコフ、ヘツケ
 ルをして盛んに論議せしめ、幾多のシヨウ、ハウプトマンをして、隨意に笑つたり哭いた
 りせしめ、幾多のガウガン、ロダンをして、盛に塗り且つ刻ましめよ。大多數の農は依然
 として、日出而作、日入而息、掘井而飲、耕田而食ふであらう。倫敦、巴里、伯林、紐
 育、東京は孤兎の窟となり、世は終りに近づく時も、サハラの天野にふり上ぐる農の轍は
 夕日に晝くであらう。

四

大なる哉の土徳や。如何なる不淨も容れざるなく、如何なる罪人も養はざるは無い。如何なる低能の人間も、爾の懐に生活を見出すことが出来る。如何なる數奇の將軍も、爾の懐に不平を葬ることが出来る。如何なる不遇の詩人も、爾の懐に憂を遣ることが出来る。あらゆる放浪を爲盡して行き處なき蕩兒も、爾の懐に歸つて安息を見出すことが出来る。

あはれなる工場の人よ。可哀想なる地底の抗夫よ。氣の毒なる店頭の人、デスクの人よ。笑止なる臺閣の人よ。羨む可き爾農夫よ。爾の家は假令豚小屋に似たり共、爾の働く舞臺は青天の下、大地の上である。爾の手足は松の膚の如く荒るゝ共、爾の筋骨は鋼鐵を欺く、烈日の下に瀧なす汗を流す共、野の風はヨリ涼しく吹く。爾は麥飯を食ふ共、夜毎に快眠を與へられる。急がず休まず一畝一畝土を耕し、遽てず悲らず一日一日其苗の長ず

るを待つ。假令思ひがけない風、旱、水、雹、霜の天災を時に受けることがあつても、「エホバ與へ、エホバ取り玉ふ」のである。土が残つてゐる。來年がある。昨日富豪となり明日乞丐となる市井の投機兒をして勝手に翻筋度をきらしめよ。彼愚なる官人をして學者をして随意に威張らしめよ。爾の頭は低くとも、爾の足は土についてゐる。爾の腰は丈夫である。

五

農程呑氣らしく、のろまに見える者は無い。彼の頭は澤山の空間と時間とを有つてゐる。彼の多くは帳簿を有たぬ。年末になつて、残つた足らぬと言ふのである。彼の記憶は長く、與へ主が忘れて了ふ頃になつてのこゝに禮に來る。利を分秒に争ひ、其日々々損徳の勘定をし、右の酬を左に取る現金な都人から見れば、馬鹿らしくてたまらぬ。辰爺さん

の曰く「伶俐なやつは皆東京へ出ちやつて、馬鹿ばかり田舎に残つて居るでさア」と。さもあれ農をオロカと言ふは、天網を疎と謂ひ、月日をのろいと言ひ、大地を動かぬと謂ふ意味である。一秒時の十萬分の一で一閃する雷光を痛快と喜ぶはいゝ。然し、開闢以來まだ光線の我儕に届かぬ星の存在を否むは僻事である。所謂「神の愚は人よりも敏し」と言ふ語あるを忘れてはならぬ。

六

農と女は共通性を有つてゐる。彼美的百姓は曾て美しい都の娘達の學問する學校で「女は土である」と演説して娘達の大抗議的笑ひを博したことがある。然し乾を父と稱し、坤を母と稱す Mother Earth など言つて、一切を包容し、忍従し、生育する土と女性の間には、深い意味の連絡がある。土と女の連絡は土に働く土の精なる農と女の連絡である。

農の弱味は女の弱味である。女の強味は農の強味である。蹂躪される様で實は塔載し、常に負ける様で永久に勝つて行く大なる土の性を彼等は共に具へてゐる。

七

農程臆病なものはない。農程無抵抗主義なものはない。「田家衣食無^レ厚薄、不見^レ權門身即樂」で、官衛は彼等にとりてびく／＼ものである。然し彼等の權力を敬するは、敬して實は遠ざかるのである。税も、こぼしながら出す。徴兵にも泣きながら出す。御上の沙汰としあれば、大抵の事は泣きの涙でも黙つて通す。然し彼等が斯くするは必ずしも御上に隨喜の結果ではない。彼等が政府の命令に従ふのは、彼等が強盜に金を出す様なものだ。此邊の豪農の家では、以前よく強盜に入られるので、二十円なり三十円なり強盜に奉納の小金を常に手近に出して置いたものだ。無益の争して怪我するよりも、と諍らめて然うす

るのである。農は従順である。土の従順なるが如く従順である。土は無感覺の如く見える。土の如く鈍如した農の顔を見れば、限りなく蹂躪してよいかの如く誰も思ふであらう。然しながら其無感覺の如く見える土にも、恐ろしい地仁があり、恐ろしい地震があり、深い心の底には燃える火もあり、沸く水もあり、涼しい命の水もあり、燃せば力の黒金剛石の石炭もあり、無價の寶石も潛んで居ることを忘れてはならぬ。竹槍勝旗は、昔から土に倅しい無抵抗主義の農が最後の手段であつた。露西亞の強味は、農の強味である。莫斯科まで攻め入られて、初めて彼等の勇氣は出て来る。農の怒りは最後で耐へられる。一たび發すれば、是れ地盤の震動である。何ものか震動する大地の上に立てやうぞ。

八

農家に付きものは不潔である。だらしがないのが農家の病である。然し缺點は常に裏から

見た長所である。土と水とが一切の汚物を受け容れなかつたら、世界の汚物は何處へ行くであらうか。土が潔癖になつたら、不潔は如何なることであらうか。土の土たるは、不潔を排斥して自己の潔を保つでなく、不潔を包容して一大生命の温床たるにある。「吾父は農夫也」と耶蘇の道破した如く、神は正しく一の大農夫である。神は一切を好と見る「吾の造りたるものを不潔とするなかれ」是れ大農夫たる神の言葉である。自然の眼に不潔なし。而して農は尤も正しい自然主義に立つものである。

九

土なるかな。農なるかな。地に人の子の住まん限り、農は人の子にとつて最も自然且尊貴な生活の方法で、且つ其救であらねばならぬ。

二 『地の子』の思想

蘆花と同じく、自ら田園に地を耕して生活し、しかも蘆花よりも以上に進んで現實の文明を批評し、解剖し、その明晰な田園主義を唱へてゐるものは、石川三四郎である。

三四郎は、現代を風靡してゐる唯物論的社會主義思想とは全然異なる、それと對立するところの系統の思想家である。彼は、フランスの田園主義的無政府主義者フウリエ、ブルウソン等の思想に共鳴し、そこから發足してゐるものゝ如く、その他、英國に於てはカーペンター、ラスキン、ウヰリアム・モリス等の一種の藝術的社會主義の畑から多分の收穫をあげ、さらにフランスに於ては、ルネ・カントン、アンリ・ブーブール、エリゼ・ルクリュ等、都市的マスキス學派に對立する田園主義的無政府主義思想の系列のなかに自らを置く、現代日本の異彩ある思想家である。

彼は、現代の唯物論的文明を「疾病」であると断定するところ、カアペンタアと同じ立場に立つ。——身體に於てその「健康」を成す生理的統一が失はれて疾病が起ると、其諸部分の争闘乖離が現はれ、或は一部の機關の異常な發達を現はし、又は侵略的萌芽の爲に其全組織の衰亡を來すのと同様に、吾々の近代生活に於ては、眞正な社會を構成する所の統一調和といふものが失はれてしまひ、そして、階級間と個人間との鬭争は行はれ、或る者は異常な發達を遂げて他を滅し、社會的寄生群は其組織體を疲弊せしめる。……かういふ見方はカアペンタアの現代文明に對するそれであるが、三四郎もこれに共鳴するものである。

マルクス學派によつて、代表される唯物論的社會主義が、因つて立つところの根底は、ダーヴィンによつて代表される進化論的思想であつて、即ち、人類は未完成より完成へ向つて進化すべき決定的運命を賦與せられてゐるといふ思想である。マルクスの言ひ方をすれば、社會主義運動も、この社會進化論の行程に参加するものに過ぎないのである。即

ち「此運動は普遍的形式を以て行はれなければならぬ。即ち空想的組織を實現する目的でなく、勞働階級其他の諸階級をして、其眼下に推移しつゝある社會の歴史的變遷の行程に自覺的に關與せしめることを目的とせねばならない」のである。「社會の歴史的變遷」——即ち、社會の進化に確かな一貫的法則を認めるのは、換言すれば、進化論の思想なのである。

けれども、三四郎は、これの否定的立場に立つ。彼はその著『非進化論と人生』によつて、この進化論思想の罪惡史を展開してゐるのであるが、彼は言ふ。「羅馬は希臘よりも進歩して居たとは必ずしも言ひ得ない。希臘文明は必ずしもベビロン文明よりも偉大であつたとは言ひ得ない。拉丁詩人ホラアスは、時間は却つて世界の價值を減ずると考へた。プラトオは、黄金時代を遙かに往昔の時代に回顧した。人間は祖先の代に於て其理想郷たるエデンの園から追放されたのだ。と、ヘブリユ民族は考へた。支那人の惱みは時代が益々堯舜の世から遠ざかるといふ點にあつた。……………」

カアペンタアも、人類の黄金時代を原始に考へ、近代の文明をもつて人類の疾病であると看破し、その解剖及びその救治を『文明の疾病とその救治』に述べてゐるが、さきにその名をあげた非マルクス學派の田園主義思想家達は、いづれも、ダアヴィンによつて完成された進化論を拒否してゐる。昆蟲界の研究によつてアンリ・ファーブルは、自然界及び動物界の研究によつてルネ・カントンは、いづれもダアヴィンの進化論を否定してゐるのである。エリゼ・ルクリュの如きは、人類の第四紀、即ち地質學者の控え間に計算したところによれば、基督紀元前一萬年であるとされてゐるこの時代に、その洞穴に彫られた驚くべき藝術について語つてゐる。そしてこれらの動物畫は、近代藝術家の力作である最も美しい描寫に匹敵し得ることを説いてゐる。

即ち、前者マルクス學派的思想は、その根底に進化思想を把持し、未來に於ける完成が人類に約束されてゐると信ずるものであり、したがつて、あらゆる時代は、それにつづくべき時代の前段階であつた、今後もそうであるであらうと見る。後者は、古の人が進歩を

ば頽廢なりと見做した厭世思想には深い事實上の根據があつた。恰もそれは現代人が頽廢をば進歩と見做す過度の樂觀思想に一つの誤つた原則が存するのと同様である。喝破し、絶對的の意味に於ては、進歩の語は何等の意義をも含まない。蓋し世界は無限であつて、此無邊な廣大の中にあつては、始も終も常に等しく遠方に存在するのである。社會の運動は其構成要素、即ち個人の運動に還元せらるべきであるが、生から死まで數年にして成就せらるべき人間が、如何なる運動をもつて其進歩を決すべきであるか？ と説く。そして、各時代は、各時代それ自身その意味、その目的をもつのであると説く。進歩、退歩、完全、不完全の思想は、無限界に介在する有限者の相對的創造に過ぎない。「地の子等は、其有限利那の生活を以て、地の生命を生活し、天の光明を生活し、此に無限に即したる廣い生活を體現せんことを希ふものである。勞働を尊ぶ者は自ら節約を行ひ、耕作に志すものは、常に反省を學び、無限を想ふものは其利那を慎む。」

そして萬人の爲に眞の進歩となるべき生活として、ユリゼ・ルクリエは言ふ。——「吾等

の起源、吾等の現在、吾等の近き目的、吾等の永遠の理想を達観し、體現して、地球そのものと一體となり、又、人類一體の意識を確かに握り、人類と動物と植物との生活に適したる環境を分配し、整理し、吾等の庭園即ち地球を耕作し、吾等を繞圍する陸と海と大氣とを整頓する。乃ち此の如くにして始めて進歩は行はれる。」

一言にして言へば、「自然に行け」といふ思想である。カタベンタアの「宇宙的意識」といふも、つまりはこの意識の外のものではない。

さて石川三四郎は、無政府主義者として日本の社會運動の先驅者であるが、大正の初頭フランスを中心として西歐に渡り、彼地に十年の間百姓の生活をしつゝ研究を積むところあつた現代有数の碩學であり、現在、東京府下千歳村に草屋を營み、農耕生活に従事してゐる。こゝに彼の代表的な一文を轉載して、彼の面目を紹介することにしたいと思ふ。左の一文は彼の『土民生活』三題するものゝ全文である。

『人間は、自分を照す光明に背を向けて、常に自分の蔭を追ふて前に進んで居る。固より其一生を終るまで、遂に其蔭を捉へ得ない。之を進歩と言へば言へるが、又同時に退歩だとも言へる。長成には死滅が伴ふ。門松は曠途の旅の一里塚に過ぎない。』

人間は、生きやう、生きやう、として死んで行く。人間は、平和を、平和を、と言ひながら戦つて居る。人間は、自由よ、自由よ、と叫びながら囚はれて行く。上へ、上へ、とばかり延びて行つた果樹は、枝は榮え、葉は茂つても遂に實を結ばずして朽ち果てる。輪廻の渦は果し無く繰返す。レヴォリユションといふも、輪廻の渦に現はるゝ一小波動に過ぎない。進化は常に退化を伴ふものである。夜無しには晝を迎へ得ない。晝の次には夜が廻て来る。

人間は、輪廻の道を辿つて果しなき旅路を急いで居る。自ら落着くべき故郷もなく、息ふべき宿も無く、徒らに我慾の姿に憧憬れてあえぎ疲れて居る。旅の恥はかき棄てと唱へて些かも省みる處なく、平氣で不義、破廉恥を行ふ。今の世の總ての、人は、悉く異郷の

旅人である。我が本來の地、我が本來の生活、我が本來の職業、といふ如き思想は、之を今の世の人に求めても得られない。彼等の生活は悉く是れ異郷の旅に外ならぬ。總ての職務と地位とは腰掛である。今の世の生活は不安の海に漂ふ流浪生活に外ならぬ。放浪生活に事務の擧る譯が無い。教師も牧師も官吏も商人も百姓も大臣も、我が故郷を認め得ずして生涯旅の恥をかき棄てゝ居る。旅の恥をかゝんが爲に競ひ争て居る。疲れ果てゝ地に倒れる時我影の消ゆると共に人は幻滅の悲哀に打たるゝであらう。國家、社會が、幻滅の危機に遭遇したる時、乃ち大變革が來るのである。

國民共同生活の安全と獨立と自由とを維持する爲めに軍隊は造られたものである。其れが、隣國の同胞の共同生活の安全と獨立と自由とを破壊する爲に用ゐられる。個人と個人との間の、地方と地方との間の、物資の有無を融通し、需要と供給とを調和する爲に商業は行はるべきである。其れが、其有無の融通を妨害し、供給を壟斷する爲に行はれる。暴力の横行を防禦して民人の自由、平等を保護せんが爲に設けられたる警察は、暴力を用ゐ

て民人の平和的自由を妨げする。人民の熱望と熱慮によりて選擇せらるべき筈の代議士は自から詐欺、脅迫、誘惑の「選舉運動」を敢てして省みない。政府も、學校も、工場も、女郎屋も、淫賣屋も、教會も、寺院も、悉く是れ吾等自ら幻影を追ふて建設したる營造物に過ぎない。かくて偉大なる近代的バベルの塔は科學と工學の智識を傾倒して築かれた。

人間は自ら建てたバベルの塔に攀ち登らん爲めに競ひ苦しむ。されど其塔は吾等自らの陰である幻影である。吾等疲れ果て、地上に倒るゝ時、吾等自身の陰も亦消滅し去る。幻滅の悲劇とは即ち是である。吾等は生れながらにして無明の慾を有つて居る。身を養はんが爲の食物を過度にして、吾等は却て其胃を毀ふ。徳に伴ふべき名聲を希ふて、吾等は却て吾が徳を損ふ。美に誇るより醜きものは無いであらう。無明の慾を追ふて、吾等自身の影を追ふて生きてゐるものは、幻滅の悲劇を見ねばならぬ。

抑も吾等は地の子である。吾等は地から離れ得ぬものである。地の回轉と共に回轉し、地の運行と共に太陽の周圍を運行し、又、太陽系其ものゝ運行と共に運行する。吾等の智

慧は此地を耕して得たものでなくてはならぬ。吾等の幸福は此地を耕やすにあらねばならぬ。吾等の生活は、地より出で、地を耕し、地に還へる。是のみである。之を土民生活と言ふ。眞の意味のデモクラシーである。地は吾等自身である。

進化論生存競争論が生れて以來、文明人の理想は「自然の征服」にあつた。自然の征服は即ち地の破壊である。地の破壊は即ち吾等自身の破壊である。文明生活が人間生命の類廢を將來する所以は此處にある。文明生活は即ち地に對する叛逆に外ならぬ。

されど、地を離れて吾等如何にか活きん。地を離れて吾等何處にか食を求めん。地は吾等と與ふべき總てを産む。曾て佛國ドルドオニ縣に土民生活を營んで居た時、私は一九一七年五月五日の日記に次の如く書いた。

「芽が生えた。昨夕まで地の面に一點の縁も見へなかつたのに、今朝は翠い芽が一面に地からはじけ出て居る。右はアリコ（インゲン）、左はボア（豌豆）、何といふ勢ひであらう。意氣天を突くといふのは、ホンとに今の彼等のことである。」

「芽が俄かに生えた。私が眠つて居る間に、地面を突破して現はれた。アの新鮮な大氣を呼吸する活々した姿、種子は私が蒔いたのだ。インゲンには肥料をウンと置いてやつた。二週間前に蒔いたのが今日生えたのだ。蒔いた私は芽の生えるのが待遠しかつた。アの元氣なある萌芽を見ると今更ら希望に充たされる。」

「昨日馬鹿に暑かつた。木も草も芽も枯れ果てるであらうと氣づかはれた。種子は地下にあつて定めしもがいたであらう。ケレども熱い日の夜には露が降りる。ソウだ。昨夜の露、アの無聲の露が、地を潤ほして、軟かにしてくれたので、稚い芽は自らを延ばし得たのだ。」

「昨日の日光の熱さは、實にタイラントの暴政の如く吾々を苦しめた。柔かい種子も地下でもがいたに相違ない。然シアのタイラントは却つて若い種に活動の元氣を與へた。夜露が降りたのは、實はアのタイラントの御蔭である。昨日はアのタイラントの烈暑の爲に枯れ果てるであらうと思はれた種が、今朝は鬱勃たる希望に充ちて萌え出て居る。全くミ

ラクルの様だ。併し是れが自然だ。」

「種が無ければ芽は生えぬ。蒔いた種は時を得て生える。花を愛し實を希ふものは、先づ種を蒔かねばならぬ。恐るべきタイラントも却つて地層突破の動機たることを思へば、不幸の間にも希望がある。恐怖の間にも度胸が坐る。種を蒔く者は幸いだ。」

然り、種を蒔く者は幸福である。地は吾等に生活を與ふべく、吾等に勞作を要求する。地は吾等自身であることを忘れてはならぬ。」

地は吾等に生活を與へるばかりでなく、吾等の心を美に育む。(一九一七年——
六日の日記に、私は次の如く書いて居る。

「バクレットの小さな花が一面に咲いて居る。清らかな、純白な、野菊に似た無數のバクレットは、柔かい青芝生の廣庭一面に、浮織の様に咲き揃ふて居る。私は今、其自然の美しい生きた毛氈の上に身を横たへて暫し息ふて居る。」

「稚い緑の草の芽は、時々微風に戦いて幽かに私語くことさへあるが、バクレットは何

時も靜かに沈黙に耽けつて居る。其小さな清らかな、謙遜な面を揚げて、高い大空と何かしら無語の密話を交して居る。空には一點の雲も無い。色彩を好む我々には頼りない程澄み渡つて居る。彼の際涯なき大空に對して、事の細やかなバクレットは抑も何を語るのであらう。

「バクレットの沈黙の深いこと！ 彼女の面は太陽の光を受けて輝いて居る。無數の姉妹が一齊に輝いて居る。天の星が太陽の光に蔽はれて居る間、彼等は地の星の如く光り輝いて居る。大空の深さが如く、彼等の沈黙の深いこと！ 其美しい輝やき！ バクレットは地の子である。謙遜なる地の子である。」

コウした自然の中に、井を掘りて飲み、地を耕やして食ふ。人間の生活は其れにて充分である。其れが人生の總てである。人間は地と共に生きる外に、何事も爲し得ぬものである。地の與へる美の外に人間は些かの創作をも成し得ぬものである。吾等は地に依りてのみ天を知り地によりてのみ智慧を得る。地獨り吾等の教育者である。地獨り眞の藝術家

である。地を耕すは、即ち地の教育を受けるに外ならぬ。地の養育を受けるに外ならぬ。而して地を耕すは、又、地の藝術に參與することである。然り地を耕すは、即ち吾等自身を耕す所以である。

社會の進歩とは、社會と其個人とが、地の恩澤を正しく深く充分に享受すると言ふことで無くてはならぬ。希臘は地の利を得て勃興した。而して希臘人が其地利を亂用して却て地を離れて地を忘れたる時、頽廢に歸した。強大なる羅馬帝國も、土臭を厭へる貴族や富豪の重量の爲に倒潰したのである。ヨリ多くの地をヨリ深くヨリ善く耕すことは、吾等の名譽、吾等の幸福である。それと同時に、自ら耕さざる地面を領有するのは、不名譽にして罪惡である。領土の大を誇る虚榮心は、即ち多くを耕すといふ名譽の幻影に過ぎない。

吾等が土に着き、地を耕すのは、是れ天地の輪廻に即する所以である、工業も、貿易も、政治も、教育も、地を耕す爲に、地を耕す者の爲に行はるべき筈のものである。吾等の理想の社會は、耕地事業を中心として、一切の産業、一切の政治、教育が施され、組織

せられねばならぬ。換言すれば、土民生活を樹てるにある、若し土民生活者の眼を以て今日の社會を見んか、如何に多くの無益有害なる設備と組織とが大偉觀を呈して存在するかが、分るであらう。そして其爲に如何に多くの人間が無益無有害なる生活を營むかど、分るであらう。そして其爲に如何に多くの有爲の青年壯年が幻影を追ふて生活するかど、分るであらう。今や、世界を擧げて全人類は生活の改造を叫呼してゐる。されど其多くは幻影を追ふてバベルの塔を擧げざるに過ぎない。ミラアジを追ふて喧騒するに過ぎない。幻滅の夕、彼等が疲れ果て、地上に倒るゝの時、地は靜かに自ら回轉しつゝ太陽の周圍を廻つて居る。そして謙遜なる土民の鍬と鎌とを借りて、地は彼等に平和と衣食住とを供するであらう。

然り、地の運行ロタシオンとレボリユシオンの運行、是れ自然の大なる舞曲である。律呂ある詩其ものである。樂其ものである。俗耳の聽く能はざる樂、俗眼の見る能はざる舞、俗情の了解し能はざる詩である。梢上に囀づる小鳥の聲も、豁谷を下る潺湲たる流

も、山頂に吹く松風の音も、濱邊に寄する女波男波のさゝやきも、即ち是れ地のオーケストラの一部奏に過ぎない。地は偉大なる藝術家である。

吾等は地の子、土民たることを光榮とする。吾等は日本歴史中「土民起る」の句に屢々遭遇する。又世人革命を語るに必ず「蓆旗竹槍」の語を用ゐる。蓆旗竹槍は即ち土民のシムボルである。

其「土民起る」の時、其蓆旗竹槍の閃めく時、社會の改造は即ち地のレポリュションと共鳴する。幻影の下に建てられたるバベルの塔は其高さが或程度に達したる時、地の回廻運動の爲に振り倒されるのである。此幻滅のレポリュションは即ち地のドラマである。

地のロタシヨンは吾等に晝夜を與へ、地のレポリュションは吾等に春夏秋冬を與へる。

此晝夜と春夏秋冬とは地に於ては一である。地の子、土民は、幻影を追ふことを止めて地に着き地の眞實に生きんことを希ふ。地の子、土民は多く善く地を耕して人類の生活を豊かにせんことを希ふ。地の子土民は地の藝術に共鳴し共働して穢れざる美的活生を享樂せ

自然・田園・農人
(終)

んことを希ふ。士民生活は真である。善である。美である。』